ゼロの使い魔　～異世界奔走記～

貧ジャック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔　～異世界奔走記～

【Ｎコード】
Ｎ９７５３Ｙ

【作者名】
貧ジャック

【あらすじ】
シャイターンの門が武器を調達した際、人間も調達してしまったようです。
地球から飛ばされたオリ主は、元の世界に帰るための手段を探すため、異世界の様々な土地を奔走することとなる。
現在、悪魔の門にて東方へ向かう準備中。
筆者は初心者かつ初投稿です。拙い文章ですがよろしくお願いしま

す。

第零話　リクルートは空に舞う（前書き）

初投稿です。よろしくお願いいたします。

第零話　リクルートは空に舞う

～アジア某国某街にて～

私はとある会社員兼研究者、理由(わけ)あってこの街を訪れている。
つい先ほど、企業から連絡があり、急ぎ身支度をしている。相手先が急遽、予定を変更してきたとのことだ。

「やれやれ、ホテルにチェックインして、早々にチェックアウトすることになるとは思わなかったな」

愚痴をいいながら、長年愛用しているスーツに身を包み、心を入れ替えるため鏡に向かって営業スマイルの練習をする。

――　にやり　――

・・・誰がどう見ても悪人の笑みです、本当にありがとうございました。まだまだ訓練が必要だなこれは。

兎に角、これで心の切り替えができた。資料やノートＰＣなどの手荷物をアタッシュケースにまとめて、部屋を出る。
相手は既にエントランスで待っているとのことだ。急な予定変更とはいえ、これ以上待たせてしまっては相手の心証を害してしまう。

「こんにちは、織田義昭(おだよしあき)さん。お会いできて光栄です」

エントランスに着いて直ぐに、丁寧な日本語を話すビジネスマンに話しかけられる。
金髪で角刈りの中年美丈夫(ナイスミドル)、そして珍しい月目(オッドアイ)、うん、写真で見

た人物だ。
実にダンディな雰囲気を醸し出している彼が、クライアントの指示した相手、チェザーレ氏で間違いなさそうだ。
「こちらこそ、お会いできて光栄です。チェザーレさん」
まずはお互いに握手を交わす。すると彼は、まるでお手本のような満面の笑みで・・・
「早速ですが織田さん、貴方をマフィアから保護させていただきます」
「は？」
ＦＢＩの証明書（バッチ）を見せながら、実に物騒な言葉を吐いた。

〜　原作　ゼロの使い魔　〜

私・・・いや俺こと、織田義昭は追いかけられている。
鬼ごっこの相手は、絵に描いた様なゴロツキ共が１０人以上。最初は人種も姿も違う、まったく関連性の無い連中だと思っていたが、素人の俺にもわかった事がある。

一つ、奴らは皆、拳銃やら刃物やらで武装している者ばかり、つまり堅気の人間達ではないこと。
二つ、そんな物騒極まりない奴らの目標が俺であること。まあ、俺の荷物が目的なのかもしれないが、どっちでも同じこと、鬼に捕まれば確実に酷い目にあう。
炭酸一気飲みしたらゲップがでるくらい確実だ。

〜　二次創作　ＩＦ　〜

パパパン！
バンッ！バンッ！

「うおっ！？畜生、撃ってきやがった！」

逃走劇開始からおよそ数十分、連中は痺れを切らしたのか発砲してきた。一発も俺に当たっていないのは威嚇射撃だからなのか、はたまた連中がヘボなのか。・・・できれば後者であってほしい。いやホント、マジで。

「ＨＥＹ！ビビってんならそのまま止まっちまえよ！」

汚い英語で喋るな聞き取り辛い、あとこの状況で止まるバカはいないだろ、と心の中でツッコミつつ裏路地からメインストリートへ抜ける道へ入る。
街の地理を覚えていて向かう目的地も明確だが、こんな場所を逃走経路に選び延々と走り続けるのはバカか阿呆かドMだと思う。
もっとも、逃げつつも相手のセリフを聞き取ろうとする俺はバカか阿呆に分類されるんだろうな。

〜　異世界奔走記　〜

ホテルでの一連のやり取りの後、FBI犯罪捜査官のチェザーレさんとその仲間に連れられ車に乗る。
「ここは危険（イカれた）な街だから」
そう言いつつ、万が一に備えてと、仲間の居場所を記した手書きのメモを渡される。しばらくメインストリートを通っていたが、途中で事故が起きており通行止めされていたためサブストリートへ迂回する、ここまでは何事もなく問題なかった。
問題は何故俺がマフィアに狙われているのか疑問に思い、チェザーレさんに問いかけようとしたその時だ。

前方の護衛車が月面宙返りよろしく盛大に吹っ飛んだ。

鬼ごっこ開始の合図は爆音だった。

〜　第零話　リクルートは空に舞う　〜

バンバン！
タン！タン！
ガガガガガ・・・・

襲撃してきたのは黒いスーツで身を固めた男たちだった。銃撃戦の中、俺はチェザーレさんに護られ車の陰に隠れていた。
しかしこの人、二丁拳銃使いとは。乱戦にも関わらず命中率が恐ろしく高い、それも相手の急所へだ。跳弾でヘッドショットとか・・・これがチートという存在か。

「織田、銃は使えるな？」

「は、はい」

急に呼び捨てで話かけられ、緊張で声がどもってしまった。そんな俺を見たチェザーレさんは落ち着けと言いつつ、おもむろに拳銃をホルダごと渡してきた。ご丁寧に予備のカートリッジを添えて。

護衛対象の俺に拳銃を渡すのはどうかと思ったが、一緒にいたＦＢＩは全滅、少しでも戦力が欲しいのだろう。俺が訓練（レクチャー）を受け拳銃の心得がある事を彼が知っていたのは、事前に調べていたのだろうと勝手に納得ていた。

しかし半素人が参戦しただけで状況が変わるわけがない。結局、チェザーレさんは黒服共の注意を引きつけつつ、メモに書いてある場所まで逃げろと言い放ち俺だけをこっそり裏路地へ逃がしてくれた。

だが、逃走途中で追っ手らしき男に見つかり、後は襲われるがまま、流されるまま。気づけば裏路地で十人近い男共に追いかけられていた。

・・・途中まで俺を護ってくれていたチェザーレさんは無事なのだろうかと気になったが、まずは自分が逃げ切ることを考えるのが先だと無理やり思考を変えた。

そんな中、路地の三つ隣がメインストリートだと気づき、少しでも人目のつく場所で逃走したほうが良いのではと考え、現在に至る。

連中が他の足を用意している可能性もあったが、人目につけば他のＦＢＩが探しやすくなるだろうし街の警察機構も対処してくれるかもしれないという、かなり運頼みな算段だった。

・・・当然、そんなに世の中甘くない。

「イイ尻(ケツ)の男でも、流石にここは通せねぇぜ」

メインストリート手前でガチムチ工事夫共に行く手を遮られた。よく見ればこいつらの左脇も不自然に盛り上がっている。ってことは事故のため通行止めってのも奴らの仕業だったか・・・

・・・ちなみに俺は、こと日本という国において不細工と呼ばれる面構えだ。中肉中背でガタイもそんなに良くない。ゆえに、ガチムチ野郎のセリフはきっと冗談だ、冗談であってくれ、冗談でなければ命以外の大切なナニかが・・・

閑話休題

「ここがお前のデットエンドだ！もう救援は来ないぜ？」

裏路地を走り回っている間に増援を呼ばれていたようだ。最初の倍ぐらい人数がいる。前も後ろも大勢の野郎共で囲まれた。

「いい具合にハマったね、後は神様にお祈りでもするよろし。ボンクラは仏教徒アルか？」

いや、野郎だけじゃなく、何故かチェンソーを持ったゴスロリとか、刃物を持ったいかにも中華風の姉ちゃんとか、色々と危ない女性が数人いた。すげぇシュール・・・って、何を呑気に考えているんだ俺は。

「まだだ、まだ終わらんよ！」

余計な思考をカットして行動に移る。貰った銃をガンホルダーから取り出し発砲、威嚇をしつつ横にある建物の非常階段を登る。

俺には人を殺すなんて覚悟はまだ持てそうにない、威嚇射撃が限界だ。

「お、あいつ銃なんて似合わねぇ物、持ってやがったぜ？じれってぇ、こっちも撃つか」

「おい、馬鹿やめろ！・・・運がいいな日本人、面倒くせぇが、てめぇは五体満足で連れてこいって依頼だ」

五体満足が条件とはいえ、もし相手に当てていたら手足の一本や二本は撃ち抜かれていたかもしれない、奴らなりの正当防衛ってことで。

とはいえこの捕獲条件は俺にとって大きなアドバンテージだ。連中は無暗に俺を傷つける事は出来ない。

ならば、追いつかれない限り逃げ続けることができる。建物に入ってでも屋上を飛び移ってでも何をしてでもＦＢＩがいる場所まで行くことができれば俺は助かる。そうとも、行けるさ！必ず俺はイける！

「無駄無駄、さっさと諦めな」

「いやぁ、悪あがきする男もわるくねぇな」

「トミ！トヤネナマタルオドエ！」

・・・二人目からの発言はスルーで。5階建ての階段、残り2階分登れば屋上だ、ちなみに、非常階段の扉は無情にも開かなかった。ちくせう、開けとけよ非常口ぐらい。

「あいや、もう面倒ね。全身打撲ぐらいなら問題無い違うか？」

まてなんか今、不吉な片言英語が・・・

ガキュ！ガキュキュン！

め、目の前で起きていることをありのまま話すぜ！
中華女の投げた鋼線付きナイフ　―ククリナイフのような物―がまるで生き物の如く蠢き階段を切り裂いていく、俺を避けて鉄製の階段だけを・・・って！！？

「なにいいいい！！？」

こんな状況、誰であろうと叫んだはずだ。急ぎ何かに捕まろうとするが、右手にアタッシュケース、左手に拳銃、ダメだどちらも手放すことができない、いやでも・・・などど考えているうちに階段が完全に崩壊する。

足場を失えば、後はニュートン先生の出番です。途中、スーツの上着が残った階段の残骸に引っかかるがもはや勢いは止まらない。上着が剥がれた拍子に力が加えられ、大地（アスファルト）と蒼天を交互に仰ぎながら落ちる、つまり絶賛回転落下（きりもみ）中。

「はいはい、これで鬼ごっこは終わりよ」

さらに中華女はもう一本の鋼線付きナイフを巧みに操り、そのワイヤーを俺の体に巻きつける。周りのゴロツキ共は歓声やら罵声やら叫んでいるが、俺は聞く耳を持つ余裕が無い。
突如起こった目の前の現象に思考を奪われたのだ。

青黒青黒と交互に代わる視界が急に青緑青緑と変わっていったのだ。

そして・・俺の体と意識は・・・緑の光に飲み込まれていった。

◇

「お、おい。野郎消えたぞ！？」

ナイフ一本釣りで落ちてくるはずの男が忽然と消え、一瞬ゴロツキとマフィア達は愕然としていたが、次第にざわめき言い争いが始まった。

「おい、片言女（ですだよ）！てめぇ奴を何処に隠しやがった！？」

「馬鹿言うな尻軽女！ワタシにもわからないよ！」

「ちっ、稼ぎ損ねただけじゃねぇんだ、どうすんだよこの始末！？」

ぎゃあぎゃあ言い争う女共を尻目に、男娼屋のような男が、落ちてきた鋼線を手に取りまじまじと見つめる。

「ワイヤーが途中で切られてる。恐ろしく綺麗な切断面だね」

跡に残るは切り裂かれた階段とスッパリ切れた鋼線、そして路地の宙を舞うスーツの上着だけであった。

第零話　リクルートは空に舞う（後書き）

物語のヒント

織田義昭
本二次創作のオリ主。
見た目はキモくはない、しかし表情が怖い。
笑ったその顔は・・・察してください。
射撃の腕前は・・・お察し願います。
彼の境遇は次回。

チェザーレさん
本名　ガウン・チェザーレ
ＦＢＩの犯罪捜査官。
ある事件の捜査でオリ主がマフィアに狙われている事を知り、仲間と共にオリ主を保護する。ＦＢＩが誇る天然チート。
数の暴力により生死不明、生きているといいですね。

危険な街
某国にある悪の楽園ロア〇プラ。

ドＭ
ドレッドノート級マゾヒストまたはドレッドノート級マゾヒズムの略。
肉体的精神的苦痛を他者から与えられることによって、または羞恥

心や屈辱感から、極度の快感を得る者を指す。
場合によって変質者扱いされるので注意が必要。

ガチムチ
筋肉質な人を示す言葉。男性だけでなく女性にも用いられる。
決してア゛ー♂なことをヤル人物を指す言葉ではない。

「トミ！トヤネナマタルオドエ！」
おい！おまえらはやくのぼれ！と追っ手は申しております。
解読には特殊な辞書が必要。全部で２６冊ある。

鋼線付きナイフ
中華女の獲物。ククリナイフのような刃物に鋼線または紐を付け、
投擲時の軌道変更や後の回収効率を上げている代物。熟練の捌きが
必須。
正式名称は筆者の勉強不足により不明。

緑の光
異世界への扉、ただし一方通行。
シャイターンの門が頑張って開きました。

スーツ
オリ主の着ているスーツはリクルートスーツではありません。
でも露語が良かったのでリクルート扱いになりました。
そもそも筆者にとってリクルートの定義があやふやなことが原因。

第一話　目覚めは洞窟（前書き）

半分以上が回想です。

第一話　目覚めは洞窟

視界が全て淡い緑の光で包まれている。未だ覚めない頭を働かせ現状を確認しようとする。

ここは洞窟のようだ、大きさは劇場（オペラハウス）―ＴＶで見たことがあった―　ぐらいか、それより少し狭いくらい。

磯の匂いがすることから直ぐ近くに海があるのだろう。洞窟なのに明かりがあるのは何故だろうかとよく見れば、発光性のコケのような植物が岩に点在していた。

ここまで発光するのは珍しいもっと詳しく見よう、と起き上がるが思うように体が動かない。そして体中が痛い、特に体に食い込んでいる鋼線が。

「痛っ！・・・ああ俺、階段から落ちたんだった」

恐らくあの後、俺は連中に捕まりマフィアに引き渡され監禁場所であるこの洞窟に閉じ込められたのだろう。しかし体を拘束しているのは鋼線のみ、しかも簡単に解（ほど）けそうだ。

・・・？

ここで少し違和感を感じたが、未知の植物がもたらす好奇心により”それ”は頭の外へと抜けていく。まずはナイフ付きの鋼線を解いて、詳しく観察する準備をしよう。

愛用のアタッシュケースから道具を取り出しコケへと近づく。

・・・あれ？

「なんで、俺のアタッシュケースがあるんだ？わざわざ律儀にマフィアが置いていったのか、いやまさか」

そんな優しいマフィアなんて存在するはずがない。

再び湧いてきた違和感はどんどん大きくなり、好奇心を徐々に打ち消していく。そもそも刃物が付いたままの鋼線で、傷つけてはいけない相手を拘束し続ける意味が無い。ここでようやく近くにマフィアがいるか辺りを見渡すが、マフィアどころか人ひとり見当たらない。

ふと右脇に手を添えると、貫った拳銃のガンホルダーがそこにあった、予備のカートリッジが入っている状態で。急ぎ自分が倒れていた場所を見る。

「監禁する相手の武器を放っておくなんて・・・ありえない」

この時点で違和感は不安を孕んだ何とも言えない感情に押しつぶされる。現状はこう語っているのだ。あの後マフィアに捕まらなかったし、ＦＢＩにも保護されなかった、第三者の存在すらあり得ないと。

そこにはチェザーレさんから渡された拳銃、逃走の最後まで握っていたベレッタＭ９２がコケの光を受け鈍く輝いていた。

～　第一話　目覚めは洞窟　～

とりあえず、何故”こんな事”になったのか、順を追って思い出そう。

俺の氏名は織田義昭、職業は会社役員兼研究員の２４歳。彼女は・・・察してくれ。趣味は機械弄りと漫画そしてゲーム。左利きだが箸を持つ手は右だ。あと、二人の弟妹（ていまい）がいる。

「織田と義昭って、滅ぼす側と滅ぼされる側が同居してるよな」

よく友人達に言われることだ。

なぜ親がこのような名前をつけたのか息子の俺にも謎だ。まあ今更聞くのも野暮だし、何だかんだで結構気に入っている。

ちなみに第二候補は無道（むどう）だったそうだ。どちらにせよ友人達の話の種になること受けあいだ。

「ほら、兄貴って何でも直して、何でも壊すじゃん？親父達には兄貴の将来が見えてたんだよ」

「よし兄（にい）は小さい時から皆に良い事を沢山して、たまに悪いことを平然とするでしょ？だから母さん達はそう名づけたのよ」

当時、中学生だった弟妹が、高校生の俺に向かって言ったセリフだ。

「あのな・・・。両親はそこまで考えていないぞ、絶対に。そして弟妹よ、お前達もなのか？友と同じく兄のガラスハートを粉砕するのか？」

年頃の弟妹は色々な意味で容赦が無かった。良くも悪くも俺に似てしまったか。

「よし兄のハートは分厚い鋼鉄でしょ？（言葉で）いくら叩いてもなかなか凹まないし」

「もしくはメタトロン。終末とか望みそうだし」

うん前言撤回、俺より容赦がないよお前ら。この頃から兄の威厳は消え失せていたんだな、ちくせう。

・・・思考が脱線した。今、思い出に浸るのは止そう。そもそも誰に自己紹介してるんだ俺は。

俺・・・いや私があの街を訪れたのは大きなチャンスを手に掴むためだ。

家族で経営している会社は利益の6割が2次産業、残りが3次産業の類だ。当社の格付け的に中の下といった立ち位置で、経済協定の影響をまともに受け必然的に経営が苦しくなっていた。

そんな苦境の中、朗報が入る。以前、研究機関に依頼していたとある”成分”　――新しい有機肥料の研究中に、社長（親父）が偶然発見したおそらく未発見であろう菌が生み出す成分――　の抽出方法が非常に有効であると認められたのだ。
その成分は有機肥料に使用することはできないが、医療関係者にとって新たな希望を見出せるものだったそうだ。

さらに国内の大手企業ＨＩＲＡＧＡが、ぜひそれを国際特許として世界に認めさせるべきだと協力者（パトロン）として名乗り出てきたのである。様々な好条件と共にだ。
ちなみに、当社はＨＩＲＡＧＡの傘下ということになっていた。社長がいつの間にか話を進めていたらしい。協力者になると近寄りつつ吸収合併、いやこれは一方的な吸収と言ってよいレベルだった。
社長、せめて私や社員に相談して欲しかったな。寝耳に水だったぞあれは。

そんな経緯を得て無事に特許を取得できたのだが、各国から”成分”に関する演説や抽出方法の説明を要求する声が後を絶たず、私はＨＩＲＡＧＡから各国の機関に説明する役割を与えられた。
英語を再学習するのがめんど・・・時間がないため、発見者の社長が説明に歩けば良いのではないかと進言したが、

「父親には護衛と共に各地の演説に行ってもらうよ。発見者に一大事があったら大変でしょ？君なら何かあっても・・・げふん、げふん、君なら父親以上に上手に説明してくれると思ってね」

大雑把に言ってこんな感じに捉えることのできる説明をＨＩＲＡＧＡの重役から延々と言われ、却下となった。”成分”の抽出方法を見つけたのは私なんですが、私には護衛をつけないんですか？そうですか。

・・・月夜ばかりと思うなよ？

そうして世界を奔走する中、企業から緊急連絡が入る。

「A国の大手製薬メーカーの重役が某国のとある街に滞在しており、そちらとの対談を望んでいる」

素直に好機だと思った。特許を認めても、いまだ保守的な姿勢を見せるA国。その大手製薬メーカとなれば国内におけるシェアは計り知れない。取り入ることができれば弊社とHIRAGA、そして日本にとって大きな収入源となる。

しかし向かう街は治安の悪さで超が付くほど有名だった。しかも相手はその街から動こうとはしないようだった。

万が一だが罠の可能性もある。私はHIRAGAに相手の情報や街の地理などの資料を要求し、さらに護衛を依頼した。

そう、万全の態勢で臨んだはずだったのだが、実際はご覧のありさま。あの街のマフィアに嗅ぎ付かれ、それらから保護してくれるFBIもろともホットな鉛でダンスを踊ったわけだ。

もっとも、あの街に行く以前から狙われていた可能性が高いのだが・・・・・って、

「思い返しても、何でここに俺が居るか、全っ然わけがわからん！しかも携帯も圏外だし、洞窟の奥からグーグー音鳴ってるし、ぬわ

あぁぁぁぁぁぁぁ！」

先の件でもそうだったが、一定以上の理不尽不可解が襲うと俺はとことんパニックになるようだ。軍隊でも入隊して訓練しなけりゃ当然だよなー、なんて思いつつ頭を抱えながらぐりんぐりん振り回す。もはや思考と行動が分離してしまったようだ。

しかし、途中で自ら喋ったセリフにおかしな部分があったことに気付く。

「・・・グーグーと音が鳴ってる、だと！？」

そう、洞窟の奥、いやコケの光が一番弱い箇所から呼吸のような音が聞こえるのだ。よく耳を傾ければ呼吸の他に鼓動のような音も聞こえる。人では到底出せない、重い音だ。

何か人以外の生物がいる！？

直ぐに拳銃を取り残弾とセフティを確認し、構える。そして携帯の明かりを頼りに、ゆっくりと足を進め鼓動が何なのか確認しようとしたその時、

「いったい誰だえ？わらわの眠りを妨げる者は・・・」

あからさまに不機嫌で、そして深く腹に響くほど重く、しかしどこか優しさを含んだ声が”頭上”から響いた。恐る恐る見上げてみると、そこには・・・

「恐竜！？しかも喋っただと！！？」

見たこともない大きな恐竜（？）の顔が睨みをきかせていた。

第一話　目覚めは洞窟（後書き）

物語のヒント

ベレッタＭ９２
イタリアのベレッタ社が開発した自動拳銃。
本編の拳銃はＭ９２ＦＳだが、オリ主は拳銃に詳しくないためＭ９２と混同している。
誤作動が少なく、安価であり、どちらの利き腕でも使用できる。
米軍でも正式採用されいる。

織田信長
よく魔王扱いされる不憫なお方。ぶるあぁぁぁぁ！
戦のみならず統治においても、当時としては画期的な戦略、政策を行っていたとされている。
オダデインの威力は異常。

足利義昭
信長を利用して天下を取ろうとしたが逆に利用されて滅ぼされた将軍。
残念ながら筆者はその程度しか覚えていない。ゴメンネ。

オリ主の一人称”俺”と”私”
仕事と私生活を分けるよう、心がけているようです。
仕事は”私”で私生活は”俺”といった具合。

メタトロン
数々のゲームや物語に登場する夢の金属。
体内に取り込めば、人類の無意識と宇宙の意志を感じすぎて暴走すること間違いなし。週末を望んでいるのだー。

国内大手企業ＨＩＲＡＧＡ
本作品のオリジナル企業。
発明家・平賀源内の子孫が創立したといわれる大企業。
おもに医療関係と製薬関係、精密機械の分野に進出、貢献している。

ぬわあぁぁぁぁ！
最後の時まで息子に意志を伝えようとした男の雄叫び。
しかし本編の場合は混乱による錯乱の雄叫び。

恐竜
その巨体と風貌にあこがれる子供は数多い。
大人でもあこがれる。
でも実際に現れたらケツにツララを突っ込まれた気分になるだろう。

第二話　人と竜（前書き）

感想、アドバイス等ありましたら、ぜひお願いします。

第二話　人と竜

目の前には寝起きの恐竜。しかも人語を話すときている。思わず腰を抜かさなかった自分を褒めてやりたい所だ。
拳銃を構えず一目散に逃げる。戦えば間違いなく食い殺される。

ありえない！ありえない！！ありえない！！！

俺にはその言葉しか浮かばなかった。恐竜は六千万年以上も前に絶滅しているはずだ。あれは現代まで生き残った未確認動物（ＵＭＡ）だというのか！？
混乱しそうな頭を落ち着かせようと何度も深呼吸する。

「安心おし。人間を食べるほど悪食じゃないよ」

今度は子供をあやすような優しい口調で話しかけられた。離れていても目立つ白く輝く目に見つめられ、俺は思わず口を開いてしまう。

「正直、食べないぞと言われても警戒してしまうんだが・・・」

一瞬きょとんとした顔になった恐竜だが、今度は口元を釣り上げて笑い出した。

「ふぇふぇふぇ。随分と臆病な人間だね。何処から迷い込んだんだね？」

せめて用心深いと言ってもらいたいものだ。
それはさておき、ずしんずしんと巨体を動かし恐竜は俺に近づい

てくる。次第に恐竜の体に光ゴケの明かりが当たり、その全貌が明らかとなってくる。でかい、全長十五メートルはありそうだ。恐竜の頭にはサンゴのような角が二本生えており、全身は銀の鱗に覆われ光の加減で虹色に輝いていた。

〜　第二話　人と竜　〜

人語を話す恐竜に敵意はなさそうなので、色々と質問をしたりされたりしていたのだが、どうやら事態は予想を遥かにぶっちぎって異世界まで到達していたようだ。

「おやおや、最初は気狂いの類かと思ったが、どうやら違うようだね」

「いやいや、散々話を聞いておいてそれは・・・」

酷いものだと言いたいが、こんな状況でお互いを理解するというのも無理な話だ。しかしようやくこちらの事情を理解し始めたようだ。

もっとも、こちらがこの”竜”こと海母（うみはは）の話を直ぐに飲み込めたのは、諦め5割、好奇心3割、適応力2割という無茶苦茶な思考回路が成せる所業だ。

海外を渡り歩いた俺の適応力に死角は無い。

「矛盾していないかえ？」

なんと、心を読まれた。何でもアリだなファンタジー。

兎に角、もっと詳しい情報が欲しいため、俺は暫く海母（ここ）の巣に居座ることにした。海母曰く、夜に騒がなければ居ても良い。あと食糧は自分で調達しとのことだ。

「・・・寝ているところを起こしてしまって、すまなかったな」

「なに、気にしとらんよ。わらわも久しく人間と会話できたしね」

まったく、彼女（？）が温厚で助かったといったところだ。

・・・数日後

先の海母との会話、そして今までの生活の中で、幾つか情報を仕入れることができた。

一つ、彼女は恐竜ではなく竜であったこと。しかも人語を理解し、更には”精霊の力”と呼ばれる魔法を行使できる古の竜、韻竜と呼ばれる存在だったのだ。

実際、目も体も疑った。魔法をかけた海水を飲んだら海の中で息が出来、しかもその効果は2時間以上も持続したのだから。その時の俺はヤックデカルチャーって顔していたと思う。
事のついでに潮風&防水対策として、海母に携帯食料を除く所持品全てに”不変”の魔法とやらを掛けてもらった。
しかし海母はこの手の魔法は苦手らしく、一日毎に掛け直さないと効果が切れるそうだ。残念、恒久的な物質の保護はどの世界でも困難なようである。

ちなみに後で聞いた話だが、海母が俺の所持品を見た所でようやく俺を異世界の住人だと理解したらしい。

二つ、ここは月が二つある世界であること。洞窟を抜け漁に行った帰りに夜空を見て驚愕したのは記憶に新しい。
洞窟に戻って海母にそのことを尋ねると、何を当然のことを言っているんだえ？といった具合で、かなり残念な目で見られた。ぐすん。

「いい年した坊やの嘘泣きは気持ち悪いねぇ」

・・・すみません。

三つ目、この世界には人間の他にエルフや吸血鬼、羽翼人といった種族が数多く存在することだ。彼らは韻竜と同じく、”精霊の力”を使うことができるそうだ。
てっきり俺は人型の知的生命体は人間だけと思い込んでいたのだが、海母の話ではこの海域の先に広大なサハラと呼ばれる砂漠があり、そこにエルフが住んでいるネフテスという国があるそうだ。

なお、人間はサハラから西の方面と東の方面に分かれて暮らしており、人間とエルフとの関係は最悪とのこと。戦争でもやらかしたのだろうか？

四つ目、人間も魔法を使えるということ。ただし、韻竜やエルフ達が使う”精霊の力”と根本が同じだが精霊の扱い方が違うそうだ。

「わらわ達は精霊に願うことでその力を借りているのじゃが、人間は精霊に命令をして力を行使するのじゃ」

うん、ややこしい。そもそもこの世界に精霊なんて存在がいるんだな、初めて知ったよ。

「どちらも俺にとっては魔法のようなものだ。なら、俺は両方とも魔法ってことで理解するさ」

魔法を使える人間は限られていて、彼らはメイジと呼ばれ特に西の方面に多くいるそうだ。魔法使(メイジ)いとか・・・もしかしたらホグワーツみたいな学び舎があったりするのかもしれない。

そして5つ目、ここ辺り一帯の海域と土地には地球の武器・兵器が無造作に捨てられていることだ。時代と国に左右されることなく、そうまるで博物館のごとく。

残念ながら使えそうな武器を見つけることはできなかったが、ベレッタＭ９２で使用できる弾丸が手に入ったのは大きな収穫だった。合計５０発以上。

もっとも使う機会が無いことを俺は節に願っている。物騒は嫌いだ。

◇

日も暮れはじめた時間、たき火を起こし、魚を焼きながら色々と考察する。

「うーん、サハラ砂漠ってのを地球の地理に当てはめて考えると、西はヨーロッパ、東はアジアってところかな？　・・・いかんいかん、もはや地球の常識は通用しないんだった」

今日、見聞きしたことを思い出しながらメモ帳に書き込んでいく。日記のようなものだ。漁の腕前上達も重要課題だが、日々集めている情報の整理もまた重要なのだ。

未知の土地では情報の有無が命運を分ける。俺は地球に帰る方法を見つけるために、何れは”ここ”を旅立つつもりだからだ。

もっとも、ここで帰る方法が分かるのが一番楽なのだが、今のところ収穫はゼロだ。

「おやおや坊や、今日の夕食は小魚一匹かえ？」

そんな事を考える俺を知ってか知らずか、海母は何時ものように俺をからかってくる。冷やかしはお帰りくださいと言いたいところだが、生憎と家主は俺ではなく海母だ。しかも毎日、所持品の保護を行ってくれる存在ゆえ、ここはグッと堪える。

ちなみに海母の食事方法だが、本人曰く、

「口を開けて適当に泳げば魚で腹が満たされるよ。うらやましいかえ？」

だそうだ、まるでクジラのような食事方法だな。嗚呼、テラうらやまします。

しかし、俺にとって初のサバイバルなんだ。簡単に、獲ったどー的な能力を手に入れることなど出来ない。誰でも最初の内は苦労すると思うけどな・・・

「長耳（エルフ）のはねっかえり娘だって精霊の力を使わず上手に捕っていたもんさ。坊やは泳ぎといい漁といい、よほどの不器用じゃないのかえ？」

うわ、酷い言いようだ。確かに泳ぎも漁も苦手だが、不器用ではないぞ。これでも機械整備が得意なんだ。ってか、エルフのはねっかえり娘って、誰？

・・・ふとここでエルフについてまだ聞いていなかった事を思い出し、海母に尋ねてみる。

「なあ、海母。エルフはネフテス以外に住んでいないのかい？」

海母は少し間を置いてから、

「そうさね、殆どのエルフはネフテスに住んどるよ。ごく稀に抜け出す者もいるが、本当に稀な話さ」

と答え、どうしてそんな事を聞くのかえ？と問うてきた。まあ、

あまりにも唐突な質問だったからな。

「ああ、エルフがわざわざ過酷な環境の砂漠に住む理由があるはずだと思ってね。いくら精霊の力を借りられるとはいえ、もっと楽に暮らせる土地があるはずだろう？」

俺の話を聞いた海母は目をぱちくりと驚いた顔をした。おや、意外と考えているんだね、といった思考が感じ取れる。

なぜ直ぐに海母の考えが分かるかって？基本、海母は俺をからかってくるからな。馬鹿にする時の表情を何度も見れば嫌でも考えが分かるさ。

しかし、一転して海母の表情が変化する。少し目を細め、暫く何かを考えているような素振りを見せた。なんだ、聞いてはいけない内容だったのか？

何故か居たたまれない気分になった俺は、うつむきながら色々と想像を膨らませる。

「・・・確かにエルフにはサハラを離れられない理由があるよ。今は西に住まう悪魔が起こした大災害、それを二度と起きぬよう起こさぬよう、監視しているんじゃよ。何処を監視しとるかはわからないがね」

海母の言葉に俺は思わず顔を上げる。見れば海母は遠い目で洞窟の天井を見上げている。うわ、これは地雷を踏んでしまったか？大災害と言うからには海母の家族も巻き込まれたのかもしれない。

これは・・・流石に気まずい。

「す、すまない海母。まさかそこまで悲惨な話だとはおもわ「ふぁ

ふぁふぁ、何を勘違いしているのかえ？」・・・は？」

「そもそも六千年も昔の話じゃて、それも祖母から聞いた話さね。わらわは別に悲しんでいるわけでもなく、その悪魔を恨んでいるわけでもないよ」

さいですか。まあ、気にしていないのならそれでいい。しかし六千年とはスケールがデカい。祖母から聞いたということは、海母も結構な歳 ―ギロリ― ・・・つまり六千年前からエルフは砂漠に住み着いているということか。しかし一つ気になるな。

「なあ、悪魔っていったいどんな奴なんだ？」

今までで一番気になった単語、悪魔について興味を引かれつい聞いてしまった。しかし流石に話してくれないかもしれないな、なにせ大災害と呼ばれる事を起こした存在だ。

「なに、坊やもよく知っているよ」

「俺が知っている！？」

思わず大声で俺は聞き返してしまった。俺が知っている存在、今まで海母が話してくれた種族なのだろうか？

いや、海母は”俺がよく知っている”と言った。まさか地球で言う悪魔や悪鬼の類と同じなのだろうか、だがこの世界での悪魔や悪鬼を俺は知らないし、地球では架空の生物だ。

再び考え出した俺を見て、海母は一呼吸置いてその存在を語ってくれた。

「それはね、坊やと同じ人間だよ」

第二話　人と竜（後書き）

物語のヒント

海外の適応力
その手の職業の方なら、海外を渡り歩くうちにいつの間にか身に付いているであろうスキル。

ヤックデカルチャー
セントラーディ語。
関心や興奮を伴いつつ、とても信じられない事態に遭遇した時に使用する。
「なんと（言う）」を意味する「ヤック」、「信じられない、恐ろしい」を意味する「デカルチャー」という二つの単語で構成されている。

不変の魔法
原作でエルフのルクシャナが剣（デルフリンガー）にかけている精霊の力と同じ。
通用するのは物質のみ、生物には効果が無い。

この二次創作における”魔法”
オリ主が、精霊の力と系統魔法の区別をするのが面倒なので、二つまとめて”魔法”と呼ぶことにした。
今後、独自解釈や別の力、オリジナルの派生などが出てくるため、呼び方全て”魔法”または”魔術”とする予定。

ホグワーツ
某有名小説の魔法学校。
行けるのなら一度は行ってみたい。

武器、兵器
”海母の巣”付近のそれらは、風化と”とある理由”により殆ど使用不能。
シャイターンの門は、武器・兵器として機能する物のみを召喚している設定です。とある理由は話が進行すれば出てきます。
使用可能な武器をオリ主に与えないでください、歓喜のあまり不審な行動を起こします。

海母の年齢
彼女の年齢は・・・おっと、誰か来たようだ。

悪魔、悪鬼
空想上の存在。もしくは宗教用語。
人の「煩悩」や「悪」、そして「病」を表す言葉でもある。

第三話　長耳の拳（前書き）

なぜだろう、ネタ回だと筆が進む。

第三話　長耳の拳

悪魔が人間というのは最初こそ驚いたものの、少し考えれば納得できる話だった。

とある物語で、”人の心が世を乱す。この世に悪がいるとすれば、それは人の心だ”というセリフを聞いたことがある。

・・・色々混ざってるようだが、そこは気にしない。

「どんな人間が大災害とやらを起こしたんだ？」

俺は更に突っ込んで聞いてみる。当然、メモを取りながら。

「人間の中でも特別な力を持ったメイジとその従者が起こしたそうじゃ。エルフはシャイターンと呼んで忌み嫌っておるよ。そして、今でもその力は世界を汚すと恐れておる」

世界を汚すとか、まるで核兵器や化学兵器のような表現だな。

しかし、悪魔と呼ばれる彼らにも大災害を起こすに至る理由があったのかも知れない。うん、まだまだ情報が足りないな・・・あれ？

「なあ海母。俺とこの世界の人間は本当に同じ種族なのか？」

そもそも俺の世界では、魔法なんて空想の産物として知られているだけなのだが・・・

「ああ、坊やは異世界から来たんだったね。わらわが見たところ殆ど同じと言っていいさね。違うのは魔法を使えるか否か、すなわち精霊達に命令できるかどうか、この一点だけじゃ」

「うーん、俺としては明らかに大きな違いに思えるのだが」

特別な力や能力があれば、今まで出来なかった夢のような事も実現が可能となるかもしれないのだから。

一部の人間には魔法や超能力ができる、しかし他の人間には絶対に”ソレ”を実現できない。はたしてそれは同じ人間と言えるのだろうか。

あんな力が使えたら、あの時あれだけ仕事で苦労することもなかっただろうに。こんな力が使えたら、たとえ圧倒的多数に追われたとしても、自分だけじゃなく他人も護ることができただろうに。いちいち乾いた海藻を集め、ライターで火を着けてから魚を料理する手間が省けるし・・・って、しまった！

「おやおや、真っ黒焦げじゃないか。今晩は食事抜きだね。ふぁふぁふぁ」

海母の会話に夢中で調理中の魚を盛大に焦がしてしまった。辺りに嫌に目に染みる臭いが漂いだす。畜生、なけなしの魚が・・・しょうがない、諦めてさっさと消火してしまおう。

「ふぁふぁふぁ。嫉むでないぞ、坊やよ。特別な力を使えるなんぞ、種族にとって本来は微々たるものなのじゃ。どちらも人間であることに変わりないんじゃよ」

笑いながらそう語る海母の言葉は、俺の感情を戒めるかのごとく心に深く刻まれていった。

〜 第三話　長耳の拳　〜

・・・海母から悪魔について聞いた夜から、さらにひと月近く時が流れた。

「さて、今日は探索に行きますか」

準備運動を終え、両手で掬った海水に”水中呼吸”、そして装備に”不変”の魔法をかけてもらうよう、海母にお願いする。

「おや、今日は鍛錬をしないのかえ？」

俺は海母の勧めで、漁や探索の他に、様々な鍛錬を行うようになっていた。内容は海母が考えたもので、回復以外は魔法に頼らず行う。

曰く、魔法に頼ってばかりでは己の力を底上げできないからとのこと、当然と言えば当然か。

鍛錬の成果は筋力の増加だけに留まらず、様々な部分が鍛えられた。

例えば、単に水中で息を止めるだけなら8分近く、何か動作をしながらの息止めは2分ジャストといったところだ。測った事が無い

ので断言は出来ないが、遠泳なら１０キロ以上泳げそうだ。海母の、我が子を崖から落とすかのようなメニューをこなし続けた甲斐があったというものだ。
人間、何度も追い込まれれば短期間で成長するもなのだな・・・ハハハ（遠い目）。まあ、流石に野菜人のごとく急成長するのは無理だったが。

話が変わるが、探索を行う時は色々と危険を伴うので、常に万全の状態で臨むようにしている。
以前、海母の忠告を無視し危険区域を探索に行った時、俺は海竜に襲われた。戦える装備も無く水中呼吸の魔法も切れかかっている状態だったため危うく死にかけたからな。海母が助けに来なかったら、俺は海竜の餌になっていたところだ。
・・・話を戻そう。

そんな事があったからこそ、海母は俺に鍛錬を勧めたのだろう。もはや海母には感謝してもしきれない。

「ああ、今日は鍛錬は無しだ。後、漁もしないよ。以前の収穫物で保存食を作っておいたから」

海母は鍛錬を勧めることはあっても強制はしない。鍛錬を行おうとする意志もまた力となる、だそうだ。

「おや、後でその保存食とやらを頂こうかね」

「かまわないよ。だが味は保証できない」

そう俺が答えると、海母は少し苦笑した後に魔法をかけてくれた。俺は掌の海水をごくりと一気に飲みほし、ありがとうと礼を言う。

最初は苦手だった魔法がけ海水の一気飲みも随分と慣れたものだ。
以前の探索で見つけた水中銃・ＡＰＳアサルトライフルやククリナイフ　―異世界に来た際、俺に巻き付いていた鋼線に付いていた―　を装備し準備を整え、それじゃあ行ってくると海母に告げた。
「何度も言うが、蛸岩から先は海竜の巣ぞ、決して越えてはならぬ。鍛錬により少しはマシにはなったが、万全の装備だったとしても坊やの力では一匹の海竜を追い払うことで精いっぱいじゃろうて。」
「わかってる。同じ轍は踏まないさ」
そう言いながら、俺は洞窟にある井戸のような穴へ向かい、その海面から顔を出しているイルカに近づく。
「今日もよろしく頼む」
このイルカは海母の友達らしく、自らの背に俺を乗せこの先にある海中トンネルを進む手伝いをしてくれるのだ。挨拶のついでにイルカの頭を撫でると気持良さそうにキューンと鳴いてくれる。
ちなみにこの洞窟の出入り口、最初は”ここ”一つだけと思っていたのだが、外に出る道は他にもあるようだ。
たとえば洞窟の壁を登った先にある抜け穴。これは外の断崖絶壁に通じている。何とか壁を登ることは出来ても、外の断崖絶壁を降りる術は流石に無いため、目下、保存食の日干し場所として利用している。
他には海母の寝床からさらに奥にある海水で満たされた穴がある。だが俺は行った事が無い、というより海母が通してくれない。先には何があるのかと尋ねたら、こう返答された。

「禁則事項じゃ☆」

何処かで聞いた事のあるセリフをウィンク付きで言われた。・・・もしかしたら海母は電波を受信する力もあるのかもしれない。まあ、考え過ぎか。

閑話休題

さて行こうかと、勢いよく地面を蹴る。最高にハイなテンションのまま、空中で一回転しつつ飛び込み姿勢を整え着水時の抵抗に備える。

なにしろ今回の探索は実に15日ぶりなのだ。俺の期待（ワクテカ）が高まり、自然と過剰動作（オーバーリアクション）になるのはしょうがない事だ。

ざぶん！ゴポゴポ・・・

ビリリリッ！！

「・・・あれ？」

着水音はともかく、なんだこの布を引き裂いたよな音は。思わず自分の下着（パンツ）を見るが特に問題は無い。

そもそも、引き裂き音源は俺の前方から聞こえていたようだった。しかも指先に何か奇妙な抵抗を感じる。ふと目の前に視線を向けると・・・

「〇％×＃△$！！？」

服が破け上半身が露わとなり、俺から離れつつ百面相のごとく顔を変えている長耳短髪娘がいた。

エキゾチックだったであろう衣服は見るも無残な姿となり、短髪娘の胸元の膨らみとか桃色の先端とか、とにかく全てを官能的に演出していた。

ふむ、異種族の裸も悪くない・・・って、俺は何をジロジロ見ているんだ！？

急ぎ脳内のエロティカセブンを駆逐し、彼女（の裸）から目をそらそうとしたその時、俺の耳にヒステリックな声が響いてきた。

「あなた、いきなり何するの！・・・・って蛮人！？なんでここに蛮人がいるのよ！」

恐らく短髪娘の連れであろう、彼女を庇いつつ怒りを露わにする長耳長髪娘がいた。ふと自分の手元を見れば、指先に（恐らく）短髪娘の下着だったであろう布生地が絡まっている。

・・・つまり俺はダイナミック飛び込み着水した際に、海面へ出ようとしていた短髪娘の服を破き、その一番奥にあった下着すら破き盗った後、肌蹴た部分を凝視していたと・・・完全に痴漢暴行です、本当にありがとうございました。

ハハハ、ナンテコッタイ。これは圧倒的に俺が悪い、もはや前方不注意云々の問題じゃない。犯罪者扱いされては堪らないと、即座に頭を下げあやまろうとする。

「す、すまない。まさか俺以外に誰か居るとは思わ――――ごふぅ！？」

完全な不意打ちだった。頭を下げた俺が謝罪と言い訳の言葉を終える前に、脇腹の辺りに強烈な衝撃を受けたのだ。肝臓（レバー）を抉られる激しい痛みに耐え、なんとか目を向ける。それを放ったのは長髪娘で、今まさに殴りましたといった姿勢（フォーム）だった。

しかしここで疑問が浮かぶ、なぜなら彼女の拳は俺に届いていないのだから。

「ま、待て！話を――――お〝ふぅ！？」

問答無用で追撃される。俺に一撃を与えたのは、彼女の周囲に漂っているまるで水の弾のような多数の物体、そしてそれは拳の動きと完全リンクしていた。

海中なのに水の弾とは奇妙な表現だが・・・この女は”それ”をジャック・デンプシーよろしく全て撃ち放ってきた。

「わたしの！「がはあっ！？」幼馴染に！！「げふぅ！！？」何してるのよ！！！「あばばばばば！！！？」っ――――――」

やめて！ヨシアキのライフはもうゼロよ！と止めてくる者など居るはずもない。

俺を背に乗せようと待機してくれていたイルカにいたっては、他のイルカ　―恐らく彼女達が乗って来たのだろう―　と楽しく戯れる始末。

もはや俺は激流に身をゆだねるままフルボッコとなるしかなかった。

「――――――この、蛮人があぁぁぁぁ！！！」

「うぼあぁぁぁぁ！！！」

最後の一撃、顎を抉るジェット（水流）アッパーで俺は海中から一気に空高く放り出される。

――　ＫＯ！勝者、長髪娘！！１ラウンド、開口一番で炸裂したデンプシーロールとトドメの大振りアッパーにより、犯罪者を見事撃退したぁ！！！　――

嗚呼、実況されてたら”こんな感じ”だろうな。無駄に無駄の無い無駄な妄想をしながら、俺は地面に激突する。

段々と薄れゆく視界に、突如として海母の顔が現れた。俺の顔を覗き込むやいなや、にやりと海母が笑う。

「おやおや、随分と早いお帰りだね」

俺は何時も助けてくれる海母に感謝している。だが尊敬はしていない。

「・・はやく・・・・回復してくれ・・・・・」

そこで俺は意識を完全に手放した。

第三話　長耳の拳（後書き）

物語のヒント

野菜人
戦闘民族。瀕死の状態から脱する度、能力が上昇する。
極稀に、怒りで髪が金色に輝く者もいる。
くり〇んのことかー！

保存食
海産物の干物。なけなしの知識で作っているため、どんな味になっているか未知数。

ＡＰＳアサルトライフル
旧ソ連が開発した水中銃。日没または薄暗い水中での使用を目的に制作された。地上でも一応は使用可能だが、銃の消耗が激しく連続使用は不可能。旧ソ連の武器って、無茶な物が多いと思う。
もっとも”不変”の魔法で銃の消耗が無きに等しいため、オリ主は探索時のお供として愛用している。

最高にハイ（ｒｙ
オリ主は人間なので、頭に指を突っ込んで脳みそグリグリなんてしない。

エロティカセブン
オリ主の脳内には性欲を司る七人の小人がいる。
内容はR指定につき、記すことも憚られる。

ジャック・デンプシー
本名ウィリアム・ハリソン・デンプシー
驚異的な剛腕を誇る、アメリカ合衆国のボクシング世界ヘビー級王者。
あわれオリ主はトレドの悲劇を体感することとなった。

うぼあぁぁぁぁぁ
某皇帝の断末魔。
この場合は童帝の断末魔。

ジェットアッパー、デンプシーロール、大振りアッパー
ボクシングのフィクション作品に登場する技の数々。
こんなので攻められたらフルボッコで済まないだろう。

第四話　エルフとの出会い（前書き）

原作キャラが崩壊しています。特に性格が。

第四話　エルフとの出会い

「ふー、はー、ふー、はー」

わたしは急激な運動と力の行使の所為で息が切れていた、ついでに頭もキレていた。わたしの大切な幼馴染が蛮人に”あんなこと”されたのよ。ついカッとなって、叔父さまから禁じられていた”あの技”を使ってしまった。

反省はしているわ、後悔は微塵も無いけどね。

「あの、ルクシャナ・・・わたし、大丈夫だから・・・ね？」

この娘はいつもそう。自身に嫌な事があろうが悲しい事があろうが、絶対に自分より他を優先するわ。

今だって蛮人に粗相をされて色々と表情を変化させたけど、きっとこの娘は怒ってなんかいない。だって彼女はわたしと蛮人の両方を心配しているのだから。

「アルティナ！あなたはもっともっと怒るべきよ！」

「でも、あの人も悪気があったわけではない・・・と、思うの。だから・・・ね？」

そう言って、アルティナはわたしの拳に手を添える。優しい笑顔に引っ張られ、蛮人に追撃をしようと籠めていた精霊の力がわたしの苛立ちと共に抜けていく。

ふと蛮人の方を見やると、そこには意外な光景があった。それを見た時点で、あの蛮人に対するわたしの敵意は完全に消え失せた。

「わかったわ。あなたと海母に免じて、これ以上あの蛮人を攻撃するのは止める」

まさか海母が蛮人を庇う様な姿勢で苦手な治癒を行っているなんてね。正直、驚いたわ。そんなわたし達の様子を見ていた海母は、蛮人の治療をしながら話しかけてきた。

「よく来たね、わらわの娘達。それにしても、このはねっかえり娘は随分とまあ手荒くやったものじゃ」

「今回は叔父さまの本をちょっと失敬しただけよ！ね、アルティナ？」

「・・・違うこと・・・じゃないかな」

それくらいわかっているわよ、アルティナ。ただ、ここまで海母がこの蛮人に気を使うのが気に食わなかったから、ちょっと話の内容を無視しただけよ。

大体、なんでここに蛮人が居るのよ！

その事をわたしが海母に問いただそうとしたが、既にアルティナが控えめに手を上げながら質問をしていた。

「あの・・・この人はどうしてここに？」

「ふむ。その前に娘達よ、坊やの治療を手伝っておくれ。海竜の時とは訳が違う、わらわだけでは瀕死状態を癒す事は出来ぬ。・・・坊やの話は治癒をしながら聞かせようじゃないか」

そう言いながら海母は、此方に来なさいと、首を振りわたし達に催促してきた。

～　第四話　エルフとの出会い　～

「・・・っ！んん！？」

俺はずいぶんと重い瞼を開けた。痛む全身を無視して無理やり体を起こしつつ腕時計で時刻を確認する。どうやら随分と眠っていたようだ。眠る前の記憶があやふやだったため、現状を確認するために周囲を見渡し、愕然とする。

そこには黙々と日干し海産物を貪り食う海母と、楽しそうに俺の所持品を漁る女性二人の姿があったのだ。・・・なんでせうか、この亜空間は。とりあえず、お嬢ちゃん達を止めよう。

「お嬢ちゃん達、なぜ俺の荷物を漁っている？」

しかし、俺の言葉に答えてくれたのは海母だった。それもむしゃむしゃと海産物を食べながらだ、行儀悪いぞ。

「むぐ、ようやく目が覚めたかえ坊や、ごくん。ああ、保存食は頂いてるよ。味は保証できんと言うておったが、これはこれで中々に

美味じゃぞ」

まったく会話が噛み合っていない。それに、俺が話しかけた相手はそちらのお嬢ちゃん達なのだが、こちらの声が届いていないようだ。完全に俺の所持品に夢中といった状態だな、あれは。

なあ、お嬢ちゃん方、人の物を無暗に触るなと親から教わらなかったかい？

・・・ん？海母が美味いと言った・・・だと！？

「海母の御墨付きを貰えるとは嬉しいね。作った甲斐があったよ」

こう見えて海母は相当な食通である。彼女の食事は、不味い魚は丸呑みにし、うまい魚や海藻はよく噛んで味を楽しむのだ。

その舌は人間の味覚とほぼ同じで、俺の世界だったら良い料理の評論家になれるくらいだと思っている。実際、海母が教えてくれた魚　―鯛のような魚だった―　はとても美味だった。

ここで俺は、海母はどうやって断崖絶壁の日干し場所から保存食を持ってきたんだ？と少し考えたが、すぐに理解した。あのお嬢ちゃん達が取りに行ったに違いない。その証拠に、彼女達の居る所にも（海母の所より多く）保存食が置いてある。

「一応、坊やの分も少し残してあるぞえ。流石に全て無くなるのは可哀想かと思うての」

「少し、じゃなく多く残してくれよ・・・ああ、もう遅いか」

もはや後の祭りである。探索する日を増やしたいがために作っておいた保存食だったのだが、またしばらく漁を行う必要があるな。ちくせう、この大喰らいめ。

「――――っ！！？」

突如、視界に驚愕の光景が飛び込んでくる。長髪の女性が俺のノートパソコンを弄くりだしたのだ、それもかなり無茶苦茶に。

いくら不変の魔法がかけられていても壊れる時もある、と海母から聞いていた俺は、即座に大声で注意を促す。

「そこの長耳長髪女！そんな乱暴に”ソレ”を扱わないでくれ。その方向に折ったら壊れるから！隣のお嬢ちゃんみたいに丁寧に扱ってくれ、頼むっ！」

今まで寝ていた（と彼女は思っていたであろう）俺の鬼気迫る怒鳴り声に驚いたのか、彼女はビクンと体を震わせた後、こちらを振り向き睨んできた。しかし隣の短髪お嬢ちゃんに諭されるやいなや、先ほどとは違って慎重にノーパソを弄りだした。なんでわたしが蛮人の言う事を聞かなきゃいけないのよ、などとブツブツ呟きながら。

そうそう、べネ、完璧だ。・・・彼女の最後の呟きはともかく。

「・・・で、お嬢ちゃん達は何者だ？」

一連の対応に満足した俺は彼女達に問いかけた。今ならこちらの声も聞こえるだろう。

「わたし達はエルフよ。・・・わたし達に尋ねる前に、蛮人のあなたが名乗るのが普通じゃないかしら？」

向こうはあからさまに不機嫌な態度で返答してきた。うむ、前言撤回、彼女の対応に俺は毛ほども満足していない。

確かに先程は怒鳴ってしまったし、今、名乗らなかったのはこちらのミスだが・・・言うに事欠いて蛮人とは。が、ここは感情を抑えよう。相手は１３～１５歳の小娘、ならば年上の俺が大人の対応を見せてやらねば色々と示しがつかない。

あ、そもそも示しをつける存在なんて無いよな。悲しいけど、ここ異世界なのよね。

「すまなかった。俺の氏名は織田義昭。信じられないかもしれないが、別の世界からこの世界に飛ばされてきた。今は洞窟(ここ)で暮らしていて、海母の世話になっている」

俺がそう話すと、彼女は目をぱちくりさせ、意外な物を見るような目を向けてきた。吊り上った切れ長の瞳がとても印象的だ。

「・・・へぇ。海母の話は本当だったのね。あ、わたしはルクシャナ。よろしくね」

寝ている間に海母が俺の事情を話していたのだろうか。しかし先程の不機嫌はどこに行ったのか、随分と喜怒哀楽の激しいお嬢ちゃんだな。雰囲気がガラリと変わったじゃないか。

「はじめ・・まして。わたしは、アルティナ・・・といいます。・・・エルフです」

対して隣のお嬢ちゃんは気弱なのか、おずおずと頭を下げつつ途切れ途切れの言葉で自己紹介をしてくれた。少し垂れたキツネ目で、薄ら開いた瞼の奥に翠玉の様な瞳が輝いている。

しかし、彼女達がエルフ・・・か。耳が長いだけで人間と変わり

ないように見えるが、彼女達から見た俺はどうなのだろうな。海母の話では人間とエルフの関係は最悪だったはずだが。

考え始める俺に、アルティナは頭を下げたまま話しかけてきた。

「あの・・・こちらこそ、すみませんでした。まさかルクシャナが貴方に対して”アレ”を放つなんて・・・」

ん？”アレ”って何さ？思わず俺は顎に手を当て首を傾げる。

「しょ、しょうがないじゃない！だって、幼馴染のあなたがあんな目にあったのよ！？精霊の力で”百裂拳”を放ちたくなるのも当然だわ！」

話から察するに、アルティナが”あんな事”をされてプッツンしたルクシャナが、俺に対して”アレ”こと”百裂拳”という技、いや魔法を放ったと。

つまり俺がアルティナに”あんな事”をしたわけだ・・・いかん、全然覚えていない。

「あの、すまない。お嬢ちゃん達の言っている”あんな事”から”百裂拳”に至るまで、全く覚えていないのだが・・・」

正直、言ってから後悔した。俺が覚えていないのだから、話を合わせて適当に頭を下げればよかったのだ。そうすればこの話はここで終わったはずだ。完全に藪蛇（やぶへび）である。

「「「覚えてない（の）（じゃと）！！？」」」

ホイキターーーーー。ほら見ろ、果たして藪から出てくるのは無害な蛇か毒蛇か。

「アルティナの操(みさお)を奪ったたけじゃなく、その時の事を覚えていないなんて！」

「あれは・・事故。・・・そう事故だったの。・・・あと、その言い方は誤解を招く、止めて」

「よもや、記憶が飛んでおるじゃと！？なんと不運な助兵衛じゃ！」

「有り得る話。”百裂拳”を受けて・・・辛うじて無事だったのは叔父さまと・・・たぶん、アリィーぐらい」

「ちょっと、ここでその話はやめてよ、アルティナ！」

何故かはわからないが海母まで食いついてきた。話の内容から俺が引きずり出したのは毒蛇とわかる。

しかも、ガールズトークから所々で不穏な単語が聞こえてくる始末。

うおおおお、俺は一体何をしたんだ、されたんだ！？

思わず頭を抱え座り込んでしまう。その挙動を見た二人と一匹は、俺にさらなる憐みの視線を向けてきた。

「のう、坊やよ。何も気にすることはない。そう、初めから何もなかったのじゃ」

海母、白く輝く目が霞みだしているぞ。なんか、その、心配かけて悪かった。

「本当に・・・ごめんなさい」

アルティナ、君は謝るべきじゃない。そんなに耳が垂れるほど落ち込むな。君はむしろ被害者なのだろう？俺が何をしでかしたのかわからないが、謝るべきはこちらだと思う。

「ま、まあ、蛮人が”百裂拳”に耐えられるはずないわよね。あやまるわ、ごめんなさい」

そしてルクシャナ、お前はもう少し反省と自重をしろ。話の流れからして真っ先に謝るべきはルクシャナだろうに。あと、いくら温厚な人間でも、そう何度も蛮人と呼ばれれば流石にキレるぞ？

まあ兎に角、これ以上、騒ぎを大きくされてはこちらも堪らない。色々あったようだが俺は生きているのだから、それでいいじゃないか。

・・・決してアルティナにした事の内容から逃げているわけではないぞ。

「見ての通り五体満足で生きている。だからそんなに気にかける必要は無いさ」

出来る限りの笑みで語りかける。・・・二人とも、なんでそんなに怖がっているんだ？

「うむ、そうじゃの。少し記憶が抜けてしまったとはいえ、よくぞ……あの状態からここまで持ち直したものじゃ」

「え　ぇ！？」

第四話　エルフとの出会い（後書き）

物語のヒント

ルクシャナ
原作登場人物。
原作の描写では、補助系の精霊の力しか行使していなかったと思いますが、この作品では攻撃系　―特に水の精霊―　の力を行使してきます。
性格も少し（？）変わっています。
その辺の話は次回。

アルティナ
オリキャラ一人目。
ルクシャナの幼馴染。イース６のイーシャのような容姿です。

ルクシャナの叔父さま
アルティナの養父。
この作品では中盤以降に登場予定。
百裂拳、第三の被害者。ルクシャナにそれの封印指定を命じる。

治癒
水の精霊にお願いして肉体を修復する。
海母は攻撃と防御に特化している分、治癒は苦手という設定。
そもそも海母は、原作では能力未知数なので、本作品ではご都合主

義によりこうなりました。
今まで苦手ながらも鍛錬で傷ついたオリ主を治療してくれていました。

食通
たまに、うーまーいーぞー、と叫んで口から光線を出す。
海母の場合、氷のブレスを吐くため注意が必要。

オリ主の所持品（荷物）
エルフ達は主にアタッシュケースの中を漁っていた。
ノートパソコン、説明資料、携帯電話と充電器、日用品、海外出張のお供など、色々な物が入っていた。オリ主、お供を見られなくてよかったですね。
ちなみに、漁ることを進めたのは海母だったりする。曰く、口で説明するより見た方が早いじゃろ？とのこと。

翠玉（すいぎょく）
エメラルドの和名

百裂拳
世紀末よりオラオラの方がイメージしやすい。
アルティナが考案した体術で、ルクシャナが精霊の力を利用した魔法に昇華、強化した。
驚異的な威力を誇るが、欠点として十分な水分（水の精霊）を確保できなければ使用できないことと消耗の激しさが挙げられる。
後に、その威力を体感した彼女の叔父により封印指定を受ける。

今までの被害者はオリ主含め四名。

不運な助兵衛
ラッキースケベの反対語と思われる。

アリィー
原作登場人物。
ルクシャナの婚約者であり、ルクシャナとアルティナの幼馴染。
きっと将来、嫁の尻にしかれ振り回されるであろうイケメン君。
百列拳、最初の被害者でもある。本作中でアルティナが”辛うじて無事・・・たぶん”と言っていたが、実際は重傷を負ている。南無。

第五話　俺の名前を言ってみろ（前書き）

オリ主、ルクシャナ暴走回。これは彼らの仕様ゆえ、御寛仁を。
いつの間にか総ユニークが１０００を超えていました。ありがとうございます。

第五話　俺の名前を言ってみろ

まだ幼少の頃、わたしは叔父さまに連れられてきたアルティナと出会った。

「この娘はわたしの知人の子供だ。彼が諸事情で育てることが出来なくなったため、こうして連れて来たのだよ。ルクシャナ、この娘と仲良くできるね？」

「うん！わたしルクシャナ。あなたのなまえをおしえて？」

「・・・アルティナ・・・です」

「よしよし、いい子達だ」

叔父さまはそう言って、わたし達の頭を優しく撫でてくれたことを今でも覚えていわ。

でも一緒に暮らす内に、わたしはアルティナを他とは違うと感じ始めたの。賢いのよ、それも大人のエルフ以上に。

最初わたしは妹のように彼女と接していたけど、次第に幼馴染の友人といった具合に一線を引いて接するようになったわ。当の本人もその方が気楽だったみたい。

当時から他のエルフと違う思考や思想を抱き、周囲を驚かせ、わたしが蛮人を研究する学者になるきっかけを作った不思議な娘、大切な幼馴染。アルティナのことをもう一人の幼馴染　―わたしの婚約者―　は気味悪がっていたけどね。

でもそのアルティナのおかげで、わたしは”ともだち”こと海母と出会う事が出来たのよね。

あ、海母って名前はわたし達が名付けたの。最初はわたし達を長耳娘って呼んでいたけど、何度か訪れる内に”わらわの娘”って呼んでくれたのよ。だからわたし達も二人で考えた名前で呼ぶことにしたの”海母”ってね。

～　第五話　俺の名前を言ってみろ　～

「わたしは蛮人の事、とぉーーーーーーっても興味があるの！さっきも言ったけど、わたしこれでも蛮人を研究してる学者なのよ」

「・・・何度も聞いたよ」

先の負傷により漁ができなくなった俺は、現在、同居中のエルフ二人と韻竜一匹に養われている。最初は、このくらいの体の痛みなど平気だと漁に出かけていた。しかし、どうやら俺の体は相当弱っていたようだ。

漁を初めて二日目、イルカで海中トンネル移動中に普段なら避けられるはずの岩へ右目をぶつけ負傷、さらに別の岩に頭を強打してしまい気絶してしまったのだ。

その後、二人に救助されたのだが、治療の際に体が治りきっていないことがバレてしまい、海母より俺に外出禁止令が下されたのだ。

今日の留守番兼治癒担当はルクシャナのようだ。アルティナと海母の姿が見えない、漁にでも行ったのだろうか。

・・・しかし毎日のように治癒魔法をしてもらい、さらに食糧を取って来てもらう様は完全にヒモである。我が事ながら情けなし。

「ねえねえ。今度は異世界の、蛮人の農業の話が聞きたいわ！」

正直、俺はルクシャナが苦手だ。

こんな状態にした元凶だからと言う訳ではない、俺を治療をしている時、必ずと言っていいほど人間の事を聞いてくるからだ。しかも一方的に自分達の話を語り、わたし達のことを話したんだから蛮人も（人間の）話をしなさい、と言ってくる始末。

そりゃ、有意義なエルフの情報を話してくれるなら、俺も話す気分にはなると思うのだが、如何せん、ただの世間話や彼女の思い出話がほとんどだ。

「・・・蛮人じゃなくて人間と呼んでくれ」

エルフ達は人間のことを総じて蛮人と呼んでいるそうだ。もっとも、蛮人と呼ばないエルフも中には居る、アルティナのように。

「これは癖のようなものね。物心つく前から周りのみんなが蛮人ってよんでいたのよ？すぐに呼び方を変えるのは難しいわ。それに、この世界の蛮人は蛮人と呼ぶに足る事をしているのよ」

「ならせめて俺のことは名前で呼んでくれ」

どうせ有意義な情報が得られないなら、せめて楽しく会話したい。このまま、話す度に蛮人と言われてはストレスが溜まる、徐々にだ

が確実に。
　来日した他国の方々が”ガイジン”といわれて気分を害する理由がよく解った気がする。

「ええと、ヨシュアキだっけ？蛮人の名前は覚えにくいし呼び辛いわ」

　どうやら日本人の名前はエルフにとって覚え辛いらしい。ついでに発音もし辛いようだ。
　ルクシャナが織田義昭（おだよしあき）をオデ・ヨシュアーキなどと発音した時は、あまりにも不意打ちで俺は飲み込もうとしていた食べ物を喉に詰まらせたっけな。

「あなたのこと、あだ名で”ヨシュア”って呼ぶのが何で駄目なのよ？これならわたしも発音し易いのに」

「それは・・・」

　俺が俺じゃなくなる気がする、その言葉が出せず声が詰まる。
　ここの生活は楽しい、心が落ち着くのだ。地球の社会では決して体験出来ないだろう。だからこそ恐ろしい、地球に戻る意志が砕けそうになることが。
　・・・俺は絶対に地球に帰る、帰還しなければならない。

　もっともルクシャナが来てからというもの、俺の心は癒されては壊される事が日常と成りつつある。いや、むしろ破壊される率が高い。
　しかし、そのお陰で意志が保てているのかもしれない、微妙な気分だ。

閑話休題

「案外、俺は（心が）揺れているのだろうな」

「何それ？訳が分からないわ。兎に角、わたしは色々な話が聞きたいの。これでも、あなたが他の蛮人と違うことは認めているのよ」

そこでルクシャナは言葉を止め、呪文を唱えだす。どうやら四肢の治療を終え、右目の傷を治療し始めるようだ。顔に刃物で切られたのような傷が残り、右目の視力も殆ど無い。無茶した結果がこれである、我が事ながら（ｒｙ

「ほらヨシュア、右目を見せて。あと、治療している間にヨシュアの世界の話を聞かせてもらうわよ」

・・・この女、まさか強硬手段にでるつもりか！？確かにルクシャナは蛮人とは言ってない、しかし俺は確かにその名で呼ぶなと言ったぞ。

「お、おい！俺の名ま「悪いけど早く右目を見せてね。治療できないわ」・・・はい」

治療を盾に、先手を打たれてしまったか。

こうなったルクシャナはまず間違いなくこちらの話を聞かない。この手のやり取りで、現に俺の所持品の三割は彼女に奪われてしまっている。正に我が道を行く（ゴーイングマイウェイ）といった性格なのだ。さらに行動が読めないため、とてもタチが悪い。きっと彼女の叔父や婚約者は随分と苦労している事だろう。

しかし今になって考えれば、他人に自らの呼び方を強要するというのはかなり我儘だったのかもな。こうなれば腹をくくって覚悟をきめるしかないか。

「じーーーーーーっ」

ってかルクシャナよ、いい年した女の子が鼻息荒げ血走った目で男の顔に近づく様は、非常に痛々しいぞ？俺まで痛い男になってしまいそうだ。もうなってるって？ハハハ、ご冗談を。

「わかった、わかったよルクシャナ。俺の世界の話をするから、そんなに鬼気迫る顔で近づかないでくれ」

「ふふっ。治療を始めてから約ひと月、ようやく折れてくれたわね。さあ、右目の治療を始めるわよ。ヨシュアも異世界の事を話しなさい」

とたんに満足といった表情に変わった彼女は、さーて今日のヨシュアはどんな事を話してくれるのかな～♪といった具合に鼻歌交じりに治療を始めた。俺は自分の心を折られたくなかったよ、と言いたいがここは我慢する。

・・・こうして見れば非常に容姿が整っており笑顔も素敵なのだが、如何せん残念美人という言葉が俺の頭から離れてくれない。

「なんか、そこはかとなく馬鹿にされた気がするわ」

「いや、まさか」

いかんいかん。海母も含め、彼女達は非常に勘が鋭い。また不機嫌になる前にさっさと地球の話をしてしまおう。さあ、情報(しごと)交換の時間だ。

「さて、私の世界の農業についてでしたね。まず農業の基本として――――――」

こうして騒がしくも穏やかな昼のひと時は過ぎて行った。

――――数刻後

「ふーん。農業の効率と生産力が上昇した弊害もあるのね」

「ええ、正直に言って私の国は農業政策を誤ったかと」

「しっかりと保障と利益確保手段を整えてから対応したほうが良いと思うのよ。それじゃあこちらの世界と同じだわ」

「ははは、異世界にも色々と国々には柵(しがらみ)があるようですね」

驚いたな、流石は人間を研究している学者だ。話の理解力が早い。・・・私の会社にもこういった物事の理解力が高い人材が欲しいものだ。

さて、そろそろ仕事の時間は終わりか。

「さて、今日の治療も終わり！少し痕が残ったけど、右目付近の傷はほぼ完治したわ。でも、視力の方はどうかしら？」

そう、それが一番の問題だ。残念ながら、魔法という奇跡の如き力であっても治せないようだ。俺の右視界は、かなりぼやけたルクシャナの姿を映していた。

「視力は治っていないが、全く見えないわけでもない。ありがとうルクシャナ、おかげで随分と良くなった」

俺はルクシャナに精いっぱい感謝の気持ちを込めて笑いながら礼を言った。そう、失明したわけではないのだから。

日本では事故で失った視力が０．２から１．０まで回復した例もあるくらいだ、奇跡的ではあるがまだ希望はある。

「ちょっ・・・。何よ急に、気持ち悪いわね。あと、ヨシュアの笑顔ってね、笑顔じゃないのよ。なんか、こう、根源的な恐怖を孕んでいるのよ」

ぐふっ、出来ればオブラートに包んで言って欲しい。結構、気にしているんだぞ。

この直球な性格が彼女の強みであり魅力なのだろうが、いつか取り返しのつかないことを仕出かしそうで不安だ――――って、いかん、妹を見ているような感じだ。おかげで歳より臭い思考になってきたぞ。

「ふぅ、ただい「おかえり！アルティナ！」・・・・って、何？」

俺の心の支えである女神アルティナの降臨に、思わず俺は歓喜の

あまり涙目になりながら彼女の方へ向かう。ゆっくりと這いよる様に近づくその様(さま)は紛うこと無き変態である。
しかし俺が周囲の評価を落とすような愚行に及ぶのには大きな訳がある。なぜならばっ！彼女は俺の名前を正確に言える唯一にして絶対の存在なのだ！
アルティナの下へたどり着いた俺は、ガシリと彼女の肩を掴み、とても真面目な表情で話しかけた。

「俺の名前を言ってみろ」

彼女が若干引いているのはよくわかる。誰だってこんな謎テンションの男に近寄られたくはない。
しかし、いつもこちらの心情を理解してくれている彼女は、一転して満面の笑みとなりこう言い放った。

「ただいま・・・お、織田義昭さん」

FUUUUUUUUU！ああ、心が安らぐ。短い会話でこのプラシーボ効果、ちゃんとした名前で呼ばれることがこれほど嬉しいものだとは。ルクシャナとは違うのだよ、ルクシャナとは。
彼女が若干噛んでいるのは仕様ゆえ仕方がない。否、噛んでいるからこそ心に安息が訪れるのだ。これがオタク友達の言っていた”萌え”と呼ばれるものなのか！？

「あ、おかえりアルティナ。そうそう――――」

しかし、俺の安息は直ぐに終焉を迎える。現状において最も行動の読めない女によって。

「――――そこの変態だけど、これからヨシュアって呼ぶことに決

定したから。あなたもそう呼んでね」

「ル、ルクシャナ！？俺の心の拠り所を奪う気か！」

俺は焦る気持ちにまかせるまま彼女の方を振り向き、そして見てしまったのだ。にやにやと口元を歪め目の奥には悪戯心それでいて侮蔑と呆れを含んだ、小悪魔のような微笑を。

「わたしヨシュアの事、ちょーーーーっと見誤っていたわ。あなたが異世界の話をする時はとても紳士的だったのに、まさかアルティナの前ではそんな野生動物の如き性格に豹変するとは・・・ね？」

そういえばルクシャナが、俺とアルティナの一連のやり取りを見るのは、これが初めてだったっけ。そりゃあ、大切な幼馴染が変態とこんな会話をしてたら・・・怒りますよね、普通。

ついでに、彼女は俺の焦る様を絶対に楽しんでいる。まさかこいつＳか！？

「これは決定事項です。そうでしょう？海母」

「ふむ、そうじゃのう」

漁からちょうど戻ってきた海母の確言を得たルクシャナは、得意げにふふんと鼻を鳴らす。しかし海母よ、タイミングが良すぎやしないかい？

「は、ははは・・・」

愚直に行動した結果、俺のこの世界での呼び名は”ヨシュア”と相成ってしまった。俺の阿呆・・・

第五話　俺の名前を言ってみろ（後書き）

物語のヒント

蛮人の文化
聞き出せる者ならば、ありとあらゆる事をルクシャナは聞き出そうとします。
生活習慣、建物の構造、日用品、農業、工業、商業、軍事、体術、剣術、銃技、そして魔術。

イルカ
たまに乱暴な動作をする。本人に自覚は無いためヨシュアは自分が傷を負ったことを咎められない御様子。もっとも、責める気はないのかもしれない。

留守番兼治癒
外敵に襲われる心配は無いが万が一ヨシュアに何かあった場合を考え、海母が提案した。治療、漁、自由行動の三つを一日毎にローテーションしている。

オデ・ヨシュアーキ
ハルケギニア人は寄せ鍋をヨシュナベと発音していることから”さ行”の発音が上手く出来ない、何故か名前に音引きを入れたがる、以上の点からこうなった。
筆者の完全な独自解釈であり、反省も後悔もしていない。

ヨシュア
オリ主のこの世界での名前。よかったですね。

ゴーイングマイウェイ
これよりも症状が酷い人を自己中心的、略して自己中と呼ぶ。
ゴーイングマイウェイ＜自己中＜＜＜越えられない壁＜＜＜自己厨
紙袋闇医者ファ〇ストの技では無い。

農業
ホント、この国の一次産業と二次産業はどうなることやら。

なぜならばっ！
イナズマキックを放つヒューマノイドがよく言います。

「俺の名前を言ってみろ」
貴様の名前は織田義昭ではない！オデ・ヨシュ――――――あべし！？

治療を始めてから約ひと月
つまりヨシュアはそれだけの期間、彼女達のヒモとなっていた。
爆発しろ。

オアシス

誰しも必ず一つは持っておかないと、世間の荒波に潰される、多分。地面を液状化したりはしない。

S（サド）

サディズムの略。加虐性欲とも言う。

相手に身体的または精神的に苦痛を与えることによって性的快感を味わう、またはそのような行為を想像したりして性的興奮を得る性的嗜好者のこと。

特に症状が深刻な場合、ドSとも言われる。

やり過ぎると変態どころか犯罪になります。要注意。

第六話　異端者として（前書き）

オリキャラのアルティナがメインです。

第六話　異端者として

うむむむ、と隣で何かを考え、頭を悩ませている人。いつもコロコロと表情が変わる彼は、異世界から来た織田義昭さん。わたしがこの世界で初めて出会った異世界の人間。

◇

最初の出会いは色々と驚愕に満ちたものだった。

まず、いきなり服を破かれ、そしてジロジロと色々な部分を見られてしまった。出会いとしては最悪の部類だと思う。そ、その・・・男の人に初めて・・・見られ・・・ゴニョゴニョ。

きっとその時のわたしはいつもと違って色々表情を変えていたと思う。彼やルクシャナはわたしが破廉恥な事をされて混乱していると思ったかも。

でもその時、正直わたしは自分の目を疑っていたの。服を破られたことじゃなくて、彼がわたしのよく知っている人種と余りに似ていたから。

黒髪に黒い瞳、典型的な胴長短足の体、どこかの武将のような威圧感を感じる厳めしい顔つき、そして身に付けた特異な武器と下着（トランクス）・・・

間違いなく東方の人間、もしかしたら”あの国”の人かもしれない。そんな期待がわたしの中でどんどん膨らんでいったの。

・・・気が付いたら、ルクシャナが全力全壊自重無しの”百裂拳（チェント・アックア）”で彼を海中から宙高く吹き飛ばしていたけど。

瀕死の彼をみんなで治療している時に、海母はわたし達に彼の事情を話してくれた。その話でわたしはさらに心を躍らせたの。まさか本当に彼はあの国の人間かもしれないと。

ようやく治療が終わったところで、ルクシャナが海母に証拠を見せてほしいと駄々をこねていた。人の所持品を漁る盗賊ような真似はしたくなかったけど、わたしは心の中で膨れ上がった気持が抑えられず、ついにルクシャナと一緒になって彼の鞄の中を物色してしまったの。

入っていたのはエルフ、いやこの世界では在り得ない精巧に作られた品々。そもそも、これらの品を納めていた鞄からして到底エルフには作れない物だ。

そして、わたしは一番気になっていた品に手をかけた。

それは、エルフやハルケギニア人が使用する文字とは全く違う文体で装飾された、この世界では珍しい紙が束ねられて作られた手帳。

最初の頁には鮮明に描かれた彼の肖像画と文字、次の頁からは様々な色の判子が沢山押されていた。

「やっぱりこの人は・・・」

ここでわたしは確信した、間違いなくあの国からこの世界に来たのだと。だけど、海母の話から察するに、彼は自分の意志で来た訳

ではないみたい。

突如、覇気のある怒鳴り声が洞窟中に響きわたった。彼が目を覚まし、隣に居るルクシャナの行動を止めようとしているみたいだ。

どうやらルクシャナがまず目に付けたのは独特の光沢を放つ板のような物体だったみたい。きっと、彼女はそれを手に取っていつもの調子で調べたはず。本人は慎重に行っていたようだけど、それはもっと丁寧に扱わなければいけない代物。

わたしは彼女の手からそれを取り、扱い方の手本を見せてみた。彼もそれに満足してくれたのか、うんうんと頷いていた。

そんな彼を横目で見ながら、ルクシャナはわたしに不満を漏らした。

「もう！何でわたしが蛮人の言う事を聞かなきゃいけないのよ！ねえ、アルティナ。そんなに慎重にならないで、もっといつもみたいに調べましょうよ」

「ダメ・・・これはいつも見つけてくるような・・・物じゃない。それよりもっと・・・精巧だから」

「えーー！？なんで蛮人がそんな物を所持しているのかしら。まさか本当に”異世界からやって来た”蛮人なの！？」

そう、彼は”異世界に飛ばされて来た”とびっきり不幸な旅行者、わたしとは似て非なる存在。

もし彼が大いなる意志の悪戯でここにいるとしたら、もしこの世界に見放され絶望の淵に立たされたとしたら・・・かつてのわたしと同じになってしまうかもしれない。

そしてもしそれが訪れた時、彼を支えてくれる存在がいなかったら・・・

まずは彼と会話してみようと思った。全てはそこから始まるはずだから。

～　第六話　異端者として　～

ここ数日でだいぶ体が治ってきた。もう少しで全開といったところだ。

今日の治癒当番は我が心の女神ことアルティナ嬢だ。彼女は会話だけでなく行動においても俺の心強い味方となっている。

エルフ社会の教養がどの程度かルクシャナから聞いていたが、アルティナは明らかに特異な存在だと思う。なぜなら、彼女はパソコンが使えるのだ。

いやパソコンだけじゃない、日用品から電子機器に至るまで使用法を知っており、使い方が分からないのは銃火器だけといった具合だ。

まるで初めから知っていたかのように使いこなすその様は感無量の一言に尽きる。

「これ・・・この配列なら・・もっと多種多様な要素を得ることが出来る・・・と思うの」

今は俺の親父が発見した”成分”の有益な利用法を模索すべく、二人でPC相手に奮闘中である。ルクシャナの理解力も目を見張るものがあったが、アルティナは次元が違う。思考展開と感性は俺以上、いやHIRAGA社研究員以上である。

さらに驚くことに、彼女は武芸にも秀でている。以前、ルクシャナが俺に放ってきた魔法”百裂拳（チェント・アックア）”、なんとアルティナはそれの原型となる体術を考案し実戦で使用可能な段階まで昇華させたそうだ。他にも大人のエルフ達が知らない剣技を振るうという。

ここまでの癒しと才能を秘めた彼女を、俺は何の自重もせず地球にお持ち帰りしたい気分で一杯だ。

「すごいな、俺には到底考えつきそうにない。あと、ここはどうだ？」

「うん・・・これはわたしも同意見」

ちなみに俺は仕事となると口調が変わる癖があるのだが、ルクシャナにより調きょ・・もとい矯正を受け、今ではどんな状況でも一人称が”俺”となってしまった。彼女曰く、

「ややこしいわ。”俺”か”私”かどちらかにしなさい。ああ、でも異世界の話をする時は丁寧かつ紳士な態度でお願いね」

とのこと、すごい矛盾を感じるのは俺だけか？なお、矯正の内容は控えさせていただく。あれは俺の異世界における黒歴史一号、語る事すらはばかれる。

それはともかく

「・・・？どうしたの？」

こてんと首を傾げて俺に話しかけてくるアルティナ。うん、いいぞ、非常に良い。何か別の趣味に目覚めそうな脳内艦隊（エロティカセブン）を理性の武力で駆逐しつつ、彼女との会話を続ける。

あと念のため、俺の射程範囲（ストライクゾーン）は±3歳だ、決して彼女に欲情などしていないということをここに宣言しておく。

「あ、ああ。アルティナは剣技や体術の心得があるって話してくれただろ？こういった座学だけでなく、体が治ったら実技の方もご教授願おうかと思ってね。俺はこれしか戦力がないからさ」

そう言って手を拳銃の形にし撃つような動作を彼女に見せた。実は今の考えを悟られないようにするための苦し紛れな動作だった。

先程の思考を彼女に読まれるわけにはいかない。何せこの優秀さだ。彼女もルクシャナや海母と同様に勘が鋭い可能性がある。

「わたしは・・・これでも二十代後半。わたしは・・・エルフの中でも特に成長が・・・遅い」

「・・・すいません」

ハハハ、完全に読まれとるガネ。うん、そんな子狐みたいな切ない目で見ないでくれ、俺が悪かったから。あと自分の胸に手を当てながら、せめてルクシャナくらいあれば、なんて呟かないでくれ。十分魅力的だから、貧乳はステータスだから。

「・・・閑話休題(それはともかく)、体術なら・・・今からでも教えられる」

「邪な事を考えてしまい、ごめんなさい！だからそんな怖い顔にならないで！？」

俺は初めて彼女に恐怖し、即座に日本伝統の土下座をした。俺の思考が、貧乳は・・・と考えた辺りから、彼女の目が切ない子狐から獰猛な狼へと変貌したのだ。ついでに彼女の周りに青黒いオーラが見えている。

「野生動物の思考は・・・表情に出る。・・・考えを顔に出さない・・・特訓が必要」

「ルクシャナ専用である俺の呼び名、野生動物がキターーーーー！？」

こうして女神の逆鱗に触れた俺は、特訓という名の私刑につき合

わされた。まったくもって成長してないな俺って、とほほ。

――――数刻後

「ごめんなさい。・・・やりすぎた・・・回復が必要？」

ようやく特訓が終わり、俺は肩で息をしつつ彼女に返事した。

「ぜーはーぜーはー、ああいや、さっきは完全に俺が悪かったからさ。ほんと、すまなかった」

正直、かなりきつかった。海母が考えてくれた鍛錬の内容が優しく思えるくらい。特訓中、どんな状態でも無表情でいてくださいってのも何気に辛かったな。無表情が崩れたら特訓を追加されて、いつの間にかこんなに時間が経っていた。

「一応、体力を回復させるから・・・横になって」

彼女に言われるがまま、俺は地面に寝そべる。熱を放つ体にひんやりとした地面が接し、とても心地よい。そんな俺を見て、彼女はふふふと微笑みながら回復魔法をかけ始めた。

今の特訓、素人の俺が見ても、厳しいとはいえ内容はかなり充実していたと思う。マジに何者だ彼女は？実戦経験が豊富でなければ

これ程の特訓を考え付くことはできないはずだ。
自分でも気が付かない内に俺は彼女に尋ねていた。

「しかし、パソコンの操作や特訓内容といい、どこで覚えたんだ？」

俺がその言葉を発した瞬間、彼女の体がビクッと反応した。
拙い、どうやら俺はまた地雷を踏みかけてるようだな。いかん、すぐにフォローせねば。今、この子の気分を害することは絶対に避けなければならない。

「まあ、誰にだって話したくないことはあるよな。すまん、今の質問は忘れてくれ」

「うん・・・ありがとう、ヨシアキ・・さん」

ふう、危ない。彼女は見た目通りかなり繊細だ。二人っきりのとき限定だが、彼女はルクシャナの決定を無視してまで俺の事を本名で呼んでくれる、気遣いの出来る良い女性なんだ。これ以上の信用を失うわけにはいかない。今後とも気をつけなければ。

◇

「わたしは、あなたと・・・似て非なる存在(もの)。この世界の異端者(イレギュラー)として・・・あなたを助ける」

目を閉じ地面に響く波の音を聞きながら、自分の迂闊な思考と発言を戒めるよう心に誓っていた俺は、彼女のその呟きを聞き逃していたのだった。

第六話　異端者として（後書き）

物語のヒント

胴長短足
一昔前の日本人はみんなこんな体型だった。
つまりヨシュアは典型的な日本人体型。

下着（トランクス）
もしあの場面でヨシュアの下着がなかったら、ルクシャナにより完全に抹殺されていただろう。
さよなら、文明。

大いなる意志
エルフや韻竜などが崇め敬っている存在。

お持ち帰り
可愛いモノに目が無い方は、よくこのように喋る。
誘拐は犯罪ですよヨシュアさん？

百裂拳あらためチェント・アックア
１００発の水弾という意味。
ルクシャナが百裂拳を魔法として完成させた際に、アルティナが名付けた。

ただし、ルクシャナはチェント・アックアより百裂拳の方がカッコいいという理由でなかなか呼んでくれない。

「この配列なら多種多様な要素を得る」
ヨシュアの親父が見つけた天然成分を他の成分と配合し新たな化学成分を作り出そうとしているようです。
筆者は化学が苦手＆勉強不足なので詳しく書くことはできなかった。
無念。

黒歴史一号
内容は暴力的なR指定に入るので自主規制。作者が自分で書いててドン引きした。
一号と言っているからには二号、三号も今後出てきそう。
ヨシュア、頑張れ。

貧乳はステータス
そして希少価値だ。
なお、ヨシュアにそっちの趣味は無い。多分。

エルフの年齢
この作品では、人間に比べエルフは見た目の年齢が倍以上異なる設定です。
エルフ達の成人は約四十歳後半、つまりアルティナは人間の歳で十四～十六といったところ。

土下座
日本の礼式のひとつで、土の上に直に坐り、平伏して座礼を行う。
深い謝罪や請願の意志を表す場合に行われる。
さらに深い謝罪を求められ、焼き土下座なる儀式を行う場合もある。

野生動物
ルクシャナがヨシュアの愚行に対して怒りを露わにしたとき、彼をそう呼ぶ。
今回はアルティナもそう呼び、ヨシュアの迂闊な行動を抑止する大きな枷となった。
ヨシュア、自業自得だ。

アルティナの特訓
海母の鍛錬、アルティナの特訓は別話で詳しい詳細がわかる予定。
実際、人間には無理。魔法の回復があってこその鍛錬、特訓。
ヨシュア、い？。

第七話　その手の向こうに（前書き）

累計１４０００アクセス、ユニーク２５００人、本当にありがとうございます。
今後ともよろしくお願いします。
そろそろ年度末。今後、仕事の関係で投稿が遅れるかと思います。

第七話　その手の向こうに

「坊やよ、無理はいかんぞえ。完治したとはいえ、未だ病み上がりの身じゃぞ？」

「ああ、わかってる。でも俺は時間が惜しいんだ。」

「ふぇふぇふぇ、坊やも精が出るのう。まあ、大怪我をせん様にの」

わらわの眼前で、洞窟内の海面近くにある壁面を登る人の子は、己を包んでいる殻を破ろうとするかのごとく以前よりも増して鍛錬に励むようになった。

まあ、わらわのような長寿な生物と違い、短命の人間が時の流れに焦燥を抱くのは致し方ないことじゃからの。もっとも、わらわは”滅びを迎える種族”ゆえ、その感情を理解することはできぬじゃろうな。

「ふっ、くっ！？・・・ふぬぬ！」

おや、今度は反り返(オーバーハング)った壁面を片腕で登り始めよった。それはまだまだ先の鍛錬と言ったはずなんじゃがの。やれやれ、己の限界に挑むまでになるとは、まさに”若さ”じゃな。

数日前、二か月ぶりの探索に行ってくる、と娘達同行で元気よく飛び出して行ったはいいが、随分と遅くに戻って来たときには皆がこの調子だったのう。探索で娘達と坊やの心境に何があったのか今のわらわには解らぬが、人間にしては随分と良い面構えになったも

んじゃ。

しかし、よもや物静かな娘(アルティナ)が坊やに武術を仕込んでいるとは、ついでに表情の抑え方ものう。実に奇想天外な光景じゃったわ。

あのはねっかえり娘(ルクシャナ)なんぞ、その吊り上った目を白黒させて仰天しておったわ、ふぇふぇふぇ。

「ぐ、ぬぬ、ぬ。――――――うわぁ！？」

――ざぶん！！ぶくぶくぶく・・・

おやおや、やはりまだ坊やには早かったようだね。己が重みを片腕では支えきれず、苦悶に満ちた表情で海面に落ちていったわ。

海水が緩衝になり落下の衝撃を抑えたとはいえ、あの高さから落ちたのじゃ、病み上がりの坊やにはさぞ辛かろうて。

ぷかぷか・・・

案の定、海藻のようにゆらゆらと水面を流れて来おったわ。・・・どれ、回復をしてやろうかの。やれやれ、まったく手の掛かる坊やじゃよ。

「――――――――っぐ！？げほっ！・・・ああ。海母、ありがとう助かった」

「ほれ、見たことか。坊やにはまだ無理なのじゃ。何を急いておるかは分からぬが、遠回りすることもまた人生の近道じゃぞえ？」

「忠告、感謝する。海母の進言に従って、少し休んだらまた始めるよ」

短い休憩が終わるや否や、人の子は懲りずに鍛錬を始める。

まったく、呆れたのう。この坊やは頑固なのか意地っ張りなのか、はたまた馬鹿か阿呆なのか。

否、全て違うようじゃ。坊やの心を支配しておるのは執念じゃな、それも並大抵のものではあるまいて。

まるでいつかの物静かな娘を眺めているような、そんな錯覚すら覚えそうじゃ。

「海母、いつか話すことがある。とても大事な話なんだ。それまで鍛錬の面倒を見てくれ、よろしく頼む」

不意に、心の奥底からえも言われぬ感情が湧きあがる。

終焉を待つ者が未来（さき）へ進む者と共に日々を過ごす・・・か。

このような考えなぞ、わらわの娘達が初めて此処を訪れた時ですら思わなんだ。坊やの感情に触発されたのじゃろうか、安穏としたわらわの心に影響を与えるとは、まったくもって不思議な人間じゃの。

思えば出会った頃から可笑しな人間じゃった。最初こそ、わらわの姿に驚いておった。しかし会話が通じると坊やが気づいた後、僅かな間ですっかり打ち解けてしもうたわ。

来る者は拒まず、往く者は追わずが信条じゃった。

別な存在がこの洞窟に居ようが居まいが、わらわには関係の無いことじゃったからの。訪れた者の好きなようにさせておったわ。例え、それがわらわの娘達であったとしてものう。

しかし何故かあの時は、突如として現れた人間に驚くよりも先に、この者の話を聞きしかと質問に答えてやらねばならぬ、そう感じたのじゃ。まるでこの世ならざる者に背中を押されたかのごとく。

坊やにそうしてやることが大いなる意志の望みだったのか、はたまた人間が崇める始祖の意志だったのか、それとも坊やの運命そのものなのか。

ならば、わらわが出来うる限り、見届けようじゃないか、異世界に飛び込んできた迷い人の明日を・・・のう。

〜　第七話　その手の向こうに　〜

――――三日前、海母の巣周辺海域の小島にて

「いいのか、俺に付いて来てしまって？」

「いいのよ！海母だって孤独には慣れっこだから。きっと今はさざ波の子守唄を聞いて微睡んでいるはずよ」

「海母に・・・子守唄という表現は・・似合わない」

「いや、俺が気にしている事はそこじゃないんだが・・・」

気になっている、いや心配している事は彼女達が海母の巣に来た理由だ。実は彼女達は同族のエルフに追われているのだから。

以前、ルクシャナから聞いた話によると、彼女達の叔父は本国（ネフテス）の議会議員で現在、仕事により長期不在中。

その留守を狙って、アルティナの特異な才能に目を付けていた鉄血団結党という連中が彼女達の下を訪れ、こう言ったそうだ。

『”ある報酬”を引き換えに自分たちの下で”仕事”をして欲しい』

その報酬はアルティナが断れないほど魅力的な物だったらしく、彼女はその要求を飲み、護衛としてルクシャナを連れ、連中の下を訪れた。しかし、連中から命ぜられた仕事は、彼女の心情を害する内容だったそうだ。

それは、蛮人すなわち人間を効率良く殺害する武器の開発。

自分の最も嫌う仕事にも関わらず、彼女はそれを続けそして成果を上げた。よほど報酬を手に入れたかったのだろうか。

だが、命令通り成果を上げた彼女に待っていたのは報酬ではなく次の仕事だったのだ。

その事態を知ったルクシャナは、騎士として修業中の婚約者と共に連中の周囲を秘密裏に調べ上げ、そして最も考えたくなかった事実にたどり着いた。報酬など、初めから無かったのである。

彼女達は急ぎアルティナが軟禁されている場所に向かい、研究室の護衛を魔法で吹っ飛ばした後、アルティナを連れ出し、奴らに発見されない場所すなわち海母の巣まで逃げに逃げて来たのだ。

そして、ルクシャナの婚約者はこの事実を彼女達の叔父に伝えるべく、別行動をとっているとのこと。

ちなみに、海母の巣周辺は、ネフテス最高権力者の許しが無ければ本来入ることのできない立ち入り禁止区域なのだそうだ。

・・・しかし、鉄血団結党ってネーミングセンスが完全にナチスだよな。やってることは外道そのものだし。何よりアルティナを利用するだけ利用しようとした事が許せん。

閑話休題

つまりだ、いくら立ち入り禁止区域とはいえ見通しの利くこの海域にいるのはとても不味い。探索は海中だけでなく小島も調べるのだ。

連中の追っ手が望遠鏡のような物を持っていたとしたら確実に発見される。そこんところ、お二人さんは理解していると思っていたのだが。

「なあ、大丈夫か？こんなに開けた海域の小島に居て。やはり今回の探索は海中のみにしよう。鉄血団結党の連中に見つかったら・・・」

一応、今回の探索は”ある事”を確認するのが目的だったのだが、致し方ない二人に危険が及ぶ前に海中探索に切り替えよう。

「大丈夫、問題無い」

どうやらアルティナには確信めいた自身があるようだ。だが俺にはその根拠がさっぱりわからない。

「あれ？ヨシュアは気づいてないんだ。ほら、水溜りに映る自分の顔を見てみなさい。きっと驚くから」

「？」

ルクシャナに言われるがまま、俺は水溜りを覗く。しかし、そこには頭上の青空しか映っていなかった。・・・・は？

「お、おい！？俺の顔が、いや身体の全てが映っていないぞ！」
「ふふふ。自分の強面(こわもて)を見ずに済んだでしょ？これがアルティナ特製の魔法、”認識阻害”よ！」
「ちょ、強面いうなし」

しかし凄いなこれは。恐らく彼女達も”認識阻害”をかけているのだろう、確かにこれなら連中に見つかることは無い。
いやいや待て待て、俺は彼女達をしっかり認識してるし、向こうもこちらを認識しているじゃないか。考え込む俺をよそにルクシャナは説明を続ける。
「これはね、阻害しない対象を指定できるの。わたしとアルティナ、そしてヨシュアの三人はちゃんとお互いを認識できるのよ」
「うわぁ・・・便利すぎるだろ、この魔法」

思わず感嘆の声を上げる。まさにチートと呼ぶべき性能、光学迷彩も真っ青である。

ふとここで、男のロマンが実現できるのでは？という不埒な考えが頭をよぎったが、続けて語るルクシャナの説明により俺の思考は中断した。
どうやら俺の表情が変化しなくなっても、彼女は煩悩ストッパーとして働いてくるようだ。
「ただし、今みたいな水溜や鏡に映った姿は別よ。それらも認識阻害の対象になるからね。わたし達を映さないように、鏡に対して阻

害していると考えた方がいいわ」

なるほど、つまりこの水溜りを阻害しない対象に選べば俺の身体は映るということか。しかし、アルティナにはいつも驚く、まさかこんな魔法まで開発していようとは。俺はアルティナを褒めようと彼女の方を振り向いた。

「凄いじゃないかアルティナ！こんな魔法を・・・・・・え？」

ここで俺は声を止めた。顔を向けた先には驚愕の表情をうかべる彼女がいたのだが、問題はその目線の先にある光景だ。まさに珍妙奇天烈、この言葉しか言えない光景がそこにはあった。

虚空に不気味な雰囲気を漂わせる緑の鏡のような物が浮かんでおり、その中から武器がずるずると出てきているのである。

「なんなの、これは！」

「まさか・・・悪魔（シャイターン）の・・・・門！？」

彼女達が驚き何か呟いているようだったが、俺はそれどころではなかった。必死に記憶を辿っていたからだ。

俺は確かにその鏡のような物と同じ色を見たことがある。この異

世界ではなく元居た世界、地球でだ。そうあれは追われた先の非常階段から転落した時に見た色と全く同じだ。

「おおおおおおおおおおぉぉ！！！」

俺は雄叫びを上げながら”それ”へ突っ込もうとする。これは恐怖から来る雄叫びではない、望郷の念と帰還の可能性を喜ぶ雄叫びだ。

「「ヨシュア！！？」」

視線を”それ”に向けている俺には見えないが、きっと彼女達は奇異の目で俺を見ている事だろう。今、俺はそれほどの雄叫びを発しているのだから。

ふと、周り全てがスローモーションになり、俺はゆっくりとだが確実に”それ”に近づいて行く。きっと体内や脳内でアドレナリンやらなにやらが分泌されて一瞬が長く感じるあれだと思った。

あと少しだ、もう少しでアレに触れられる、きっとこの先には俺の故郷がある、俺の帰る場所がある！俺の中の感情が沸点を超え蒸発しそうな勢いで昇っていく。

――――そして俺はその鏡のような物に手を触れた。

◇

あの探索から数日後。俺は、海母の下で鍛錬を行っていた。

二か月もの間、満足に動けなかった俺の肉体は確実に衰えていたのだ。この遅れを挽回するためにも、鍛錬の内容も今まで以上に厳しくしなければならなかった。

「――――――遠回りすることもまた人生の近道じゃぞえ？」

海母、それは俺も解っているさ。自分が相当、焦っていることぐらい。でもそれ以上に俺の心は今、希望で満たされているんだよ。

俺は”あの現象”を目撃し体感したんだ。そしてその後、二人との会話で一つの希望を見出すことができた。もはや立ち止まってなんかいられない。

「海母、いつか話すことがある。とても大事な話なんだ。それまで鍛錬の面倒を見てくれ、よろしく頼む！」

俺は何かを考えている海母にそう告げると、再び洞窟の壁を登り始めた。

・・・俺はようやく見つけたんだ、地球に帰る手がかりを。

第七話　その手の向こうに（後書き）

物語のヒント

始祖
この世界の、一部の人間が崇め奉り祈る存在。

運命
人生において、人の身では逃れられぬ流れ。
神や神の如き者によりあらかじめ定められていると定義している者もいる。

壁から落ちた高さ
海母の目線が約１５ｍだとすると、ヨシュアは１５ｍ以上の高さから落下したこととなる。
そろそろチート化してきました。

鉄血団結党
原作に出てくる党。
エルフのためなら人間を殲滅することも躊躇しない集団。
アカルイミライヲー

”ある報酬”
アルティナを迷わせる程の存在。

一体何なのかは別話で。

ルクシャナの婚約者・アリィー
この頃はまだ騎士見習いでした。
無事、ビダーシャルの下へたどり着けるといいですね。

ナチス
国家社会主義独逸労働者党のこと。
ナチスとは敵対していた国々が呼んでいた名前で、党員は自分たちの事をナチスとは呼ばなかった。
第二次世界大戦におけるその行動は狂気の一言。

”ある事”
ヨシュアが何を確認したがっていたかは次話で。

認識阻害
アルティナのチート魔法、第一弾。
水と風の精霊にお願いして効果を得る魔法。阻害しない対象を任意に選ぶことができる。
仲間の軍隊を指定してかければ、敵にとって脅威となる透明軍隊ができあがる。
これにはスネークも苦笑い。

男のロマン
女風呂、覗きイベントのフラグが立ちました。

緑の鏡
シャイターンの門のこと。
基本、一方通行です。大事な事なので二度書きました。

アドレナリン
脳内麻薬の一種。
麻薬と言うだけあって、相当な劇物です。
怒りやすい人は早死にする理由の一つとされている。

希望
人間が、ある事への実現を望み願うこと。
大きな希望は時に、深い絶望へと変わることもある。

第八話　光に触れた時（前書き）

投稿が遅れると言ったな。あれは嘘だ。
今回は緑の光にヨシュアが触れた後の話です。なお説明回の前半となっています。

第八話　光に触れた時

わたしはその光景に畏怖を感じていた。なにせ虚空から武器のような物がずるずる這い出てきてるのよ、そう感じない方が異常だわ。

「おおおおおおおぉ！！！」

見たことも無い不気味な鏡が出現したと思ったら、今度はヨシュアが雄々しく吼えながらそれに向かって全力疾走していた。

「「ヨシュア！！？」」

彼の唐突過ぎる奇行に、わたしとアルティナは思わず呼びかけたけど、彼はまったく聞く耳を持っていなかったみたいね。

わたし達が驚いている間にも、彼はオーク鬼も逃げ出しそうな顔で鏡との距離をどんどん詰めて行ったわ。

今の彼がしている表情、何かを渇望する鬼気迫る顔を、わたし達は何度か見たことがある。それは彼が鍛錬を行なっている時に、そしてわたし達に自身の世界を語っている際に、ごく稀に見せる表情だったの。

普段の彼は強面だけど、その時の表情を見たわたしはどこか哀愁じみた切ない感情を受けたわ。

気が付けば、既に彼が鏡に触れている瞬間だった。彼は何をしようとしているのか、そして何が起こるのか、わたし達の視線は彼に

釘づけとなっていたわ。

でも、その結末はあまりにも単純だった。

バチーーン！！！

彼は鏡に弾かれた。そして凄まじい勢いでこちらに戻って・・・もとい盛大に吹き飛ばされてきたわ。

「ぐうぅぅぅ！？」

最も弾かれた右手が痛むのか、吹き飛ばされた衝撃が全身を駆け巡っているのか、倒れた彼はゴロゴロと辺りを転がり呻き声を上げている。

ふと見れば、すでに鏡は忽然と消えていた。一体、何だったのかしら。そういえばアルティナは何か不穏な言葉を呟いていたけど・・・目の前の光景が衝撃的過ぎた所為で覚えていないわ。

彼の行動を察するに、まるで鏡の先に行くことが出来るような感じだったわね。鏡の先・・・まさか、あの先に彼の世界があるというの！？

だとしたら、彼の今の心境は――――――いえ、まだそうと決まったわけではないわね。

そこで、ようやく我に返ったのか、アルティナが彼に治癒をかけ始めた。続いて、わたしもそれを手伝おうと彼に駆け寄る。

「この程度の傷なら・・・大丈夫。それより、ルクシャナは・・・”あれ”を」

そう言って彼女は視線を”あれ”に向けた。その先にあったのは、鏡から這い出てきた武器のような物、どうやら彼女はあれを確保しておきたいらしい。

それはとても精巧で美しく、そして奇妙な形状をしたいたわ。片刃の曲刀で見た目よりも重い、傍に落ちているのはこの武器の入れ物みたいね。

武器を回収したわたしは、再びヨシュアの下へ駆け寄った。どうやらアルティナの魔法で治療は既に終わったようね。

「・・・・・・・」

「ヨシュア、大丈夫？・・・どこか痛くない？・・・・・ねえ、ヨシアキってば！」

脱力した身体に虚ろな表情、どう見ても彼は無残に疲弊しているわ、身体じゃなく心がね。アルティナは頻りに彼に話しかけているけど、途中から本名で呼んでもまるで無反応とは、相当深刻だわ。

「・・・うっく、くそおぉぉぉぁぁぁぁぁ！」

今度は急に泣き叫びだした。顔は絶望に満ちていて声はまるで迷子の子供の様。まったくいい歳した男の涙は見っとも無いわよ？ほら、アルティナなんて釣られて涙目になってるじゃない。

ヨシュアのこの有様を見て確信した、やはり彼は鏡の向こうに自分の世界があると考えているわね。そしてこの世界に来てから、今までずっと彼は帰りたがっていたんだわ、自分の故郷に。

つまり、わたし達と交わす日々の会話も、海母から受けている鍛錬も、この探索も、全ては自分が帰還するために行っていた・・・

・・・わたしも泣きそうになるじゃない。

〜　第八話　光に触れた時　〜

ようやく我に返った俺に待ち構えていたのは、涙目になって必死に語りかけてくるアルティナと俺に背を向けてなにやら俯いているルクシャナだった。・・・まさに穴があったら入りたい状況だ。

「その、見っとも無い所をお見せしてしまい、すまなかった。もう大丈夫だ」

未だ鼻声の状態で彼女達に話しかける。

「・・・ホント？」

「ああ、随分心配をかけてしまったな。本当に大丈夫だよ、アルティナ」

だから涙で潤んだ瞳で俺を覗きこまないでくれ。そんな表情をずっと見せつけられたら、きっと俺の心は暴走してしまう。そう、煩悩の赴くままに。

「よかった・・・もう二度と、あんな無茶はしないで。・・・危険だから」

そのお願いに対する拒否権は無い。彼女のこの表情は有無を言わせぬ強制力があるのだ。

「お、おう。わかった」

俺の返事を聞いた途端、彼女は実に晴れ晴れとした笑顔をみせてきたため、ついつい、ああ健気で可愛いな、地球にお持ち帰りしたいな、などと考えてしまった。

「ようやく落ち着いたみたいね。まずヨシュア、あなたには何故あんな行動をしたのか洗いざらい説明してもらうわよ！次にアルティナ、あなたはあの時、何やら不穏な言葉を呟いていたわよね」

ここで突然、俺達はルクシャナに話しかけられた。あまりに急なことだったため、俺はビクッと身体を反応させてしまう。しかも、彼女の声は震えに震えていたのだ。きっと、先程の唐突過ぎる俺の行動に怒っているのだろう。

ギギギと首が鳴っているかのごとく、俺は恐る恐る彼女の方を向く。

「――――え？」

色々と弁明の言葉を考えていたのだが、その全てを忘れ俺は絶句してしまう。そこにあったのは、何故か目元が赤くなっていて耳がショボーンと垂れているルクシャナの顔だった。

「・・・なに？」

開いた口が塞がらない俺に、彼女は返事をしつつ、じとーっとした視線を送ってきた。

お前も泣いていたのか、だから声が震えていたんだな、という言葉を飲み込む。このタイミングで、気丈に振舞う彼女にそれを聞くのは野暮というものだ。

・・・聞いた瞬間に彼女の魔法が飛んできそうだと思ってしまったのは内緒だ。

「いや、なんでもない。ええと、俺が何故あんな行動をしたのか、だったな？」

「そうよ。あと、あの鏡のような物は一体何なのか、鏡に触れることであなたの身に何が起きると考えていたのかも、詳しく話しなさい」

ルクシャナは俺に顔を近づけて、機関銃のように捲し立ててきた。正直いってやかましいぞ、俺の隣にいるアルティナを見習って静かにそして可愛く要求し・・・すまんかった、睨まないでくれ。

「あー、まず俺があんな行動をした理由から話そう。俺はあの鏡のような物に触れれば、自分の世界に戻れると思って行動したんだ」

流石にこれは二人とも驚くだろうな。俺が元の世界に戻ろうとしているなんて、まだ誰にも話していないし。

「ふーん。やっぱりね」
「だろうと・・・思った」

彼女達は全く驚かない、むしろ・・・気づいてたのね。

「・・・えっと、次はあの鏡のような物についてだが。正直、あれはよく分からない。ただ、あの鏡が放つ緑の光に心当たりがあったんだ」

「「え？」」

二人ともここで驚くのか。まあ、話は続けるが。

「あの光は俺がこの世界に「ばかっ！」――――！？」

説明の途中で俺はいきなりアルティナに怒鳴られた。何だ、何を怒っているんだ彼女は？戸惑う俺に彼女は珍しく激昂しながら話してきた。

「ヨシュアは・・・もっと考えて行動すべき。もし・・・あの鏡があなたの世界に・・・通じていなかったら」

「あっ！」

俺はあの時、全く考えずに行動していた。浅薄、それしか言える言葉がない。彼女達は、俺自身がよく知らない物にその場の感情にまかせて飛び込んでいった、その事実に驚いていたのか。

次第に青ざめていく俺の顔を見て、ようやく気付いたわね、といった表情で彼女は睨んでくる。そして彼女は、さらに俺の浅薄な行動を戒めてきた。

「それに・・・例え、元の世界に戻れたとしても・・・鏡から出た先がヨシュアの国じゃなかったら・・・そう、武器が沢山ある紛争地帯とかだったら・・・・・・あなたは死んでいた」

「・・・・・・・」

そんな状況下に飛び出したら、間違いなく彼女の言う通りになっていただろう。愚者の末路もいいところだ。

よく考えれば、あんな武器が出てきている時点で、鏡の向こうは日本じゃない可能性が高いじゃないか・・・

「あなたの気持・・・焦りの感情は理解できる。だけど・・・好機（チャンス）の時こそ冷静でなければならない」

「チャンスの時こそ冷静に・・・ああ、わかった」

俺はアルティナの言葉を復唱し、大きく頷く。彼女もようやく落

ち着いたのか、頷いた俺に対して笑みを返してきてくれた。
しかし、これはアルティナの番が終わったに過ぎない。次は――――

「はぁ・・・・馬鹿よねあなた、馬っ鹿じゃないの！？または阿呆でしょ！！？」

――――機関銃の如く罵声を放つルクシャナの番だな。アルティナのように俺を諭すような物言いができる女性でないことは分かっている。これは俺の罰としてしっかり聞かねば、肉体的な罰・・・魔法を放ってきそうだ。
しかし、意外にも彼女からの御咎めはなかった。

「アルティナも落ち着いたし、話を続けなさい野生動物」

・・・そうきたか。まあ、反論は全く出来ないんだが。

「はい、この野生動物めが話を続けます。・・・あの鏡の光なんだが、俺がこの世界に来る直前に浴びた光と同じ色なんだ。それで、もう一度あの光の中に入れば元の世界に戻れると思い込み――――」

「野生動物らしく突っ込んで行ったわけね？」

うわぁ、まだ言うか。このまま野生動物で呼び名が定着するのだけは止めてくれよ？

「はい・・・。あの時、さっきアルティナが指摘してくれた事を全く考えていなかった訳だが。俺は何も考えずに行動したわけじゃないぞ？」

言い訳に過ぎないかもしれないが、これは話しておかなければならない。鏡が現れたこの小島は、俺が”ある事”を確認するために訪れたと言う事を。

「海母の巣周辺海域に落ちている武器なんだが、今までの探索結果から推察するに、この小島周辺が出現場所の可能性が高かったんだ。」

「「え！？」」

驚いた彼女達は、俺に質問を投げかけてきた。しかし、こちらも説明不十分ということで質問は待ってもらう。

「悪いが先に俺の話を聞いてくれ。落ちている武器の殆どは風化や破損等で使用不能になっているが、しかし中には使える武器もあるわけだ」

そう説明しながら俺はこの辺り一帯の自作地図を広げ、彼女達に見せる。測量なぞ殆ど経験が無い人間の描いた地図だが、そこそこの出来だと思っている。

「そこで俺は、使える武器が落ちていた場所を簡易的な地図に記し、それらの場所から最も近い点を探したところ・・・」

話をしつつ、地図のある一点を指さしトントンと音を鳴らせる。

「海母の巣からほど近い・・・この小島周辺」

「なるほどー。で、予想が見事に大当たり。だったら、あんな行動もしちゃうわね」

流石、二人とも理解が早くて助かる。しかし、もう少し話す事があるんだよ。

「俺はこうも考えていた。俺がこの世界に飛ばされたのではなく、武器の巻き添(おまけ)えで一緒に飛ばされたのではないかとね。それで前の話に戻るんだが、同じ色の光を探しその中から武器が出てきている時に、光へ触れれば元の世界に戻れると考えたわけだ。まあ、あとはご覧の通りだな」

「確かに、戻れる・・・可能性はある。けど・・・やっぱり危険(リスク)の方が高い」

「それにヨシュアは見事に弾かれたわよね？」

おおお！ようやく呼び方が戻ったッ！

それはともかく、確かに俺はあの鏡、緑の光に拒絶された。しかし、元の世界であの光に包まれた時はそんな現象は起きなかったはずだ。

そこで俺は思ったことをそのまま呟いていた。

「あの鏡は一方通行なのかもしれないな」

実際に体験してみなければ分からない事だって世の中にはある。今回の場合、下手をしたらあの世逝きだったが・・・

「まあ、弾かれちゃった理由なんて、今すぐ分かる事じゃないと思うわ。そ・れ・よ・り・も！」

そう喋ったあと、ルクシャナはアルティナに近寄り、彼女の瞳を

じっと見つめ真剣な表情で問いかけた。

「アルティナ、あの時確か、あなたは鏡の事を悪魔(シャイターン)の門って呼んでいたわよね？詳しく教えてもらうわよ」

彼女に問いかけられ、アルティナはしまったといった顔をしていたが、すぐに表情を戻して答えた。

「・・・わかった。わたしの知る事・・・話す」

今日の探索開始から既に5時間、まだまだ会話は終わりそうにない。

第八話　光に触れた時（後書き）

物語のヒント

片刃の曲刀
日本刀のこと。落ちていたのは小太刀の類です。
ククリナイフと共にヨシュアの接近戦用武器にする予定。

俯いているルクシャナ
結局、もらい泣きしたようですね。

暴走
一切の制御が不能になること。
この場合、ヨシュアの理性が粉砕、玉砕、煩悩が大喝采し、アルティナの貞操に危機が訪れる。

自分の世界に帰ろうとしてる件
ヨシュアは二人とも前々から気づいていたと勘違いしたみたいです。
実際は二人とも、彼の奇行を目撃した際に気が付いたようです。

紛争地帯
最近の紛争地帯で最も酷いのはダルフール紛争かと思います。
そこやソマリア等の国に飛ばされたら、日本人のヨシュアは間違いなく命は無かっただろう。

「馬鹿よねあなた、馬っ鹿じゃないの！？または阿呆でしょ！！？」
元ネタ、某主人公がヒロイン（はいだらー）に放った言葉。

肉体的な罰
別名Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩとも言う。
うちのルクシャナは交戦的です。誰かさんの影響で。

測量
地球表面上の点の関係位置を決めるための技術・作業の総称。
ヨシュアは臨海学校で習った指などの人体を使った方法で距離を測り、地図を作製した。

第九話　秘密のお話（前書き）

やはりネタを混ぜると早く書きあがる、不思議。
後書きの政治体制の説明ですが、うろ覚えかつｗｉｋｉを頼りに書いたため、間違っている部分があるかもしれません。

第九話　秘密のお話

「・・・わかった。わたしの知る事・・・話す」

そう言って、アルティナは胸に手を置き、ふうと一息ついた。彼女は未だに困惑の表情を見せている。深呼吸をしてどうにか心を落ち着かせているのだろう。

「まず、先に・・・約束して。今から話すことは・・・他のエルフにも、そして人間にも話さないで」

落ち着きを取り戻した彼女は、いつになく真面目な表情で俺達を見つめてくる。なるほど、どうやらよほど覚悟が必要な話のようだ。

「わかったわ。約束する」

「俺も同じく。決して誰にも言わないと誓おう」

誓いの言葉を聞いたアルティナは”絶対だよ”と俺達に念を押した後、ぽつぽつと語り始めた。悪魔の門と呼んだ存在について。

～　第九話　秘密のお話　～

それは二つの月が重なる夜のことだった。わたしはルクシャナに頼まれていた人間の資料をまとめ終え、息抜きに台所で水を飲もうと廊下を歩いていた。

そこでふと、叔父さまの書斎から話し声が聞こえてきたのだ。こんな夜遅くに客人が来るとは聞かされていなかったわたしは、思わずドアの傍で聞き耳をたてていた。

「――――では、テュリューク殿。私は明日にでも東方に向かい、蛮族と交渉を始めます」

「うむ。しかしビダーシャル君、あの国の人間を蛮族と呼ぶのは相応しくないじゃろう。彼の地を治める王はわれら以上に聡明で、国を守護する将は皆一騎当千の実力者なのじゃ。先に鉄血団結党の起こした事件は君の耳にもとどいておろう？」

どうやら、会話の相手はネフテスの統領、テュリュークさまのようだった。お酒を飲んでいるのか、二人の声はどこか高揚としていた。

普段の叔父さまなら、内緒話に聞き耳を立てようものなら、即座に精霊達を通じてばれてしまう。しかし、今の叔父さまは精霊にお願いするどころか契約すらしていない。これならしばらく会話を聞いていても大丈夫だろう。

「ええ、まったくもって耳が痛い話でしたよ。ようやく我々が交渉に持ち込めたと思った矢先、あの事件ですからね。ですが、彼らも良い薬になった事でしょう」

「そうじゃな、あれほどの被害を被ればしばらく手出しをしようなどとは思うまいて。兎に角、君も十分に用心して交渉に臨むのじゃぞ？」

話の内容から、叔父さまの次の仕事先は東方の国のようだった。

以前、わたしは東方の事を”賢王が治めるとても豊かで人々の笑顔が絶えぬ土地”と叔父さまから聞いていた。そんな平和な土地に、なぜ蛮人対策委員会委員長の叔父さまが交渉に向かわなければならないのだろうか？

確か当初の予定では、西の地に向かったシャジャルさまの行方を調べに行くはずだったのでは・・・

「今でも東方の密偵は、竜の巣付近に出現する武器（ガラクタ）を何度も盗掘しているようじゃ。西の地にいる蛮族よりも多い程にのう。これ以上、竜の巣・・・・ええい、まだるっこしい！君とわしししか居らんのだから口にしてもかまうまい」

竜の巣？立ち入り禁止区域にある海母の巣の事だろうか。テュリュークさまは、ああ面倒だといった口ぶりでこう続けた。

「これ以上、悪魔（シャイターン）の門を刺激せんように、彼らの王に直訴せねばならん。交渉が上手くいったのならば、まず真っ先にこの件を進言するのじゃ。よいな、ビダーシャル卿」

あの海母の巣が悪魔の門！？確かに、この世界では製造が不可能な武器が多く落ちているけど、何度か訪れているわたしには、とても悪魔の門とは思えない。

だが、東方の密偵がロマリア以上に何度もあそこを訪れていると

いうのは、エルフから見れば大問題だ。それを止めてもらうためにも、叔父さまは東方に向かわなければならない、というわけか。

「わかっております、テュリューク統領閣下。しかし、そう何度も同じ事を言われては、私専用の耳栓を用意して頂かねばなりませんな」

ははは、こやつめ！と言ったテュリュークさまの笑い声が響き渡る。ずいぶんと酔いが回っているようだ。時折、何かを注ぐような音が聞こえていたことから、二人ともかなりお酒を飲んでいる事が容易に想像できた。

これ以上、二人の話を聞いていても有益な情報はなさそうだ。それに、これ以上の盗み聞きは流石に良心が痛む。

もっとも、今しがた聞いた話はわたしの胸の内に留めておかなければならない。これが露見したら、わたしはきっと前のような状態に戻ってしまうことだろう。

すぐに部屋に戻ろうかと一歩踏み出したとき、耳を疑いそうになる発言が聞こえてきた。

「ところで、のうビダーシャル君。以前、アルティナ君が破棄しようとしていた例の物———手に入ったかの？」

「・・・テュリューク殿、あれは前回に渡した物で打ち止めだと言ったはずですが？」

わたしが破棄しようとしていた例の物？前に渡した！？
これ以上の話を聞いてはいけないと、わたしの本能は警鐘を鳴らしている。しかし、理性は二人の話を聞き届けろと、体を止めていた。頭の中が嫌な想像で満ち溢れる。

有り得ない。まさか、そんなテュリュークさまが！？と混乱するわたしの頭に、ネフテス統領は無常にも真実を言い放った。

「むむむ。あの鮮明に描かれた女性の裸（ら）た・・・おほん！女性の姿を眺めるのはわしの楽しみの一つなんじゃがのう。そろそろ新しい書物が欲しいわい」

「わたしは正直に言って、アルティナの研究室から彼女に内緒であんな書物を回収する事に、辟易しているのですが・・・」

最も嫌な現実を突き付けられ思わず体が倒れそうになるが、必死で耐える。なんてこと、まさか叔父さまがテュリュークさまにあの本を渡していただなんて。
でも唯一の救いは、叔父さまがその行為に不快感を抱いていること。もし、何の躊躇いもなく行動していたとしてら、わたしは迷わず叔父さまに全力で魔法を放つだろう。ルクシャナと一緒に。

「かーーーっ！良いではないか、そのくらい。大体、君がアルティナ君を養子として迎える際に一番苦労したのはわしじゃぞ？・・・・・まったく、ブツブツ・・・・」

テュリュークさまに苦労をかけてしまったことは申し訳ないと思っているし、感謝もしている。だがここにきて、わたしの統領に対する評価は暴落し始めた。

ちなみに、処分する予定だった本とは異世界で俗にいう成人雑誌と呼ばれる類の書物だ。殆どは、わたしが人間の資料を分別する際に除外して、あとでまとめて処分する。
しかし最近になって、処分するはずの書物が少し抜けていることに気が付いたのだ。抜けている雑誌のジャンルは、エルフや羽翼人といった人外系のコスプレやアニメの・・・女性の・・・・は、裸の・・・・画像が乗っている物である。

閑話休題

「ここでその話を出しますか、あなたは。・・・ぬっ、その酒瓶は！？ルクシャナ達が蛮族の調査資料として集めていた蛮族の酒！？」

「ほっほっほ。何のことかのう。ふむ、今夜は二つの月が綺麗じゃのう」

「今日は月が重なっていますよ。そういったボケは無しにしていただきたい」

どうやらルクシャナに渡す予定だった酒瓶までかっぱらったようだ、このエロ爺。叔父さまは免罪として、あのエロフ統領（誤字に非ず）だけは後でしっかりお話しなければならない。無論、ルクシャナと一緒に。

わたしは部屋へと戻り、統領にするお話の内容を考えながら眠りについた。

こうして、様々な事実が露見した夜は過ぎて行ったの。

アルティナは全てを語り終え、ふうーと長い深呼吸をして俺達の顔を見つめてきた。何気にドヤ顔である。お疲れ様、アルティナ。その表情も可愛いぞ。・・・それはともかくだ。

「まあ、なんだ。確かに悪魔の門について聞けたけど・・・」

”東方”や”賢王の治める国”そして”悪魔の門”と”東方の密偵”等々、有益な情報であることは間違いない。

「でも、それ以上に・・・ねぇ？」

そう、その有益な情報を全て吹き飛ばすかのような新事実の所為で俺とルクシャナは唖然としていた。彼女も同じ事を考えていたのか、お互いに気まずい雰囲気の中で目を合わせ、そして叫んだ。

「「統領、何やってんの！？」」

確かにこの話は他言無用だ。もし露見しようものなら、色々な面でネフテスとエルフの沽券に関わる。

「誤解の無いように・・・言っておくけど、統領は・・・とても真

面目なお方」

「「どこが！？」」

・・・・・およ？ふとした違和感に俺は気が付く。どうやらルクシャナも同じ様子だ。

「珍しく意見があったわね」

「ふむ、そうだな」

俺達は互いに拳を握りコンッとぶつけ合う。ここまで息が合ったのは大変珍しい。・・・明日は雨かな。そんな俺達の様子に笑いながら、アルティナは話を続けてきた。

「テュリュークさまは・・・何時もネフテスの民を考えている。統領は・・・わたし達の叔父さまの事を唯一、気を許せる・・・存在だと仰っていた」

なるほど、エルフの最高権力者たる者その責務と重圧は計り知れないということか。恐らく、彼女達の叔父と統領のやり取りは”それ”の反動だろうな。・・・って、まてよ？

「なあ、そもそもだ。統領の暴露話の部分だけ、アルティナが語らなければよかったのでは？」

そうすれば俺達は統領の評価を落とさず、重要な”悪魔の門”の情報だけ得ることができたはずだ。すると彼女は、ちゃんとした理由がある、と断った上で語った。

「一つは・・・ルクシャナに事実を伝えるため。・・・・・もう

一つは、あの時の気分を思い出して・・・むしゃくしゃしてたから語った。反省も後悔もしていない」

・・・さいですか。多分、最後の方が本音だろう。その時、一瞬だが、彼女の後ろにドス黒い何かが見えた気がしたからな。

「しかし、まさか海母の巣周辺が悪魔の門だったなんて、驚きだわ。ヨシュアの探索で得た予想と合致してるしね。ああそれと、アルティナ教えてくれてありがとう。一段落したら、二人で一緒に統領の下へ”お話し”しに行きましょうね★」

まだ見ぬ統領よ、生きろ。スケベな欲求を満たしていた代償は甚大そうだぞ？

しかしどうしたものか。悪魔の門に触れても弾かれ、たとえその先に行けたとしても何処の国に出るか分からないときたものだ。これは他の帰還手段を見つけるしかないのか。

「ねえ。さっきの話で”東方の密偵”って言ってたけど、そいつ等は今もここに現れるのかしら？」

考え込む俺を余所に、ルクシャナはアルティナに色々と質問をしだしたようだ。その点は俺も聞きたいと思っていた所だ、実にタイミングが良い。・・・明日は槍でも降ってくるのか。

「叔父さまが交渉に行ってから・・・密偵はここを訪れなくなったと・・・聞いている」

「ふーん。じゃあ、その密偵を追って鉄血団結党みたいな奴らがここに来ることも無いわけね。安心したわ。あと聞きたいのは――――」

さて、このまま放っておけばずっとルクシャナのターンになってしまう。彼女には悪いが、次は俺が質問をさせていただく。

「――――東方の国を治め「ルクシャナ、俺に質問をさせてくれ。かなり重要な事なんだ」・・・なによ、もう！」

俺も元の世界に帰る新たな手段を見つけるために必死なんだ。だからリスみたいに頬を膨らませながら俺を睨まないでくれ、なんか凄い苛めたい気分になるから。ここはグッと堪えて欲しい、お互いにな。

「さて、アルティナ。悪魔の門と言うからには西の地に住む人間が関わっているはずだよな？」

「うん。伝承では西に住まう悪魔・・・シャイターンが起こしたと語られている」

シャイターンか、確かイスラム教で”悪魔”を意味する言葉だったな。それは兎も角だ。

「なら俺は、明日から西の地へ向かう準備を始める。ここで帰る方法が得られない以上、西の地で情報を集め、探索した方が「「やめて！！」」――――！？」

俺が話した途端、彼女達は凄まじい形相で止めてきた。何だ、今の話に何か不味い所でもあったのか？戸惑う俺に、彼女達は次々と

問題点を説明してきた。

「以前あなたに、西の地に住む蛮族は蛮人と呼ばれるに足る事をしている、って話を聞かせわよね？」

それは確かに聞いた。だが俺は同じ人間なのだ、そこまで野蛮な事をされるとは思えなかったんだが・・・

「向こうは・・・・完全な上位階級社会。魔法を使えるか否かで・・・身分が決まる。魔法の使えないあなたは平民扱い・・・情報を得るどころか・・・・その日を無事に過ごせるかすら・・・分からない」

げっ！？西の地は封建制度または絶対王政なのか？これは初耳だったな。身分の違いがある、つまり上位階級による無礼討ちのような事があるということか、物騒極まりない。

「それだけじゃないわ。西の蛮族はブリミル教という宗教を信仰しているの。その宗教はね、悪魔の門を聖地と称して、その奪還のために何千年も前から何度もエルフに戦争をしかけてきたわ」

そこら辺は海母から聞いていたな。確か、六千年前の大災害を二度と起こさないためにエルフはこの地を監視していると言ってたはずだ。

なるほど、それゆえ悪魔こと西の人間は奪還のために何度も戦争を吹っかけて来たというわけか。ようやく歴史が分かってきたな。

「簡単にはエルフも・・・・殺されない。でも、護りきれなかった・・・力の弱い者はどんどん虐殺されていった。聖地奪還の為にと称して・・・赤子から女性、老人に至るまで・・・・全て」

宗教の指示で無差別に命を殺めるとは、まるで俺の世界で言う十字軍（クルセイド）の遠征だな。世界が変わっても、人間のやる事は同じなのかね・・・

しかも、そんな宗教が何千年も同じ体制で存在しているとしたら、間違いなく文明の進歩も滞っているはずだ。最悪な場合、封建的無秩序も起きているかもしれない。

・・・・行く価値、まるで無いじゃん。

「そんな宗教が信仰されている土地に、聖地もとい悪魔の門から来たあなたが行ったらどうなると思う？良くて戦争の道具、悪くて異端審問にかけられて・・・こうよ！」

そう言いながら、ルクシャナは自分の首を絞めるような動作をしつつ舌をペロッと出してきた。縛り首ですね、わかります。

「つまり・・・あなたが西の地に行っても・・・・目的を果たせず・・・・死ぬ」

最後の言葉を言った所でアルティナは目に涙を浮かべてきた。ぐはっ！は、破壊力があり過ぎる。ようやく言いたいことを言い切った彼女達は肩で息をしながら俺に再び問いかけてきた。

「「これでもまだ向かう気なの！？」」

正直、上位階級社会の説明辺りから俺の西へ向かう気持ちは消え失せていた。やれやれ、また俺は彼女達に多大な心配をさせてしまったのか。

「心配をかけてしまったな、すまない。そしてわかった、よくわか

ったよ。西の地に向かうことは危険すぎるってことが。向かう気持どころか、興味すら消えて無くなったさ」

俺の言葉を聞いた途端に、二人は安心した笑顔へと変わる。ああ、まったくもって良い女達だな。種族の違う男に、ここまで真摯になって考えてくれているとは。

思わずまた泣きそうになってしまった俺に、行動の読めない女ことルクシャナは、ある意味トドメとなる言葉を放ってきた。

「あなたが居なくなると誰が異世界の話をするのよ？」

「ルクシャナ・・・それはちょっと・・・」

・・・おいルクシャナ、空気読んでくれ。そして俺の感動を返せ、今すぐに。そしてアルティナ、いつもフォローをありがとう。君のお陰で俺の心は荒まずに済んでいるよ。

「兎も角だ、また振出に戻ってしまったな。どうしたものか・・・」

ここで再び考え出す俺に、何か意を決した表情をしたアルティナが、ある提案を出してくれた。どうやら、俺が西の地へ向かうと言い出す前から考えていたようだ。

「ずっと考えていたの。・・・帰る手段を探すなら・・・・東方の国にいる賢王に謁見するといい」

彼女曰く、東方の国にはネフテスに勝るとも劣らない国があり、彼の地を治める賢王はあらゆる知識を求め探究しているそうだ。
アルティナの回想話で、既に何度か密偵をここへ送っていた事実があることから、賢王が何か情報を持っている可能性は高い。

「ならば向かおう。賢王が治める東の国へ」

二人と一緒にこの小島を探索して本当によかった。俺独りだけだったら絶対にこうはいかなかったからな。

「二人とも、ありがとう。お陰で道が開けた」

精いっぱい感謝の言葉を言う。もちろん自分にできる満面の笑みで。アルティナはそれに応え、笑顔で返してくれた。しかし・・・

「やめて、怖いわ」

・・・ルクシャナはやっぱりマイペースで相変わらずだった。

ようやく俺が掴んだ希望は、東方へと繋がった。

第九話　秘密のお話（後書き）

物語のヒント

二つの月が重なる夜
ハルケギニアでは”スヴェルの夜”と呼んでいる。
エルフ達も同じように呼ぶか不明のため、このような表記としました。

テュリューク
原作登場人物。
サハラ砂漠にあるエルフの国、ネフテスを束ねる統領。
ネフテスは議会による共和制となっており、彼を「王」と呼ぶことは侮辱となるので注意が必要。
この数百年の間に急速に発展した東方の”ある国”を非常に気にかけており、和平交渉をビダーシャルに依頼する。
なぜかエルフ版オールド・オスマンとなってしまったお方。
筆者曰く、書き易い、とのこと。不憫。

”あの事件”
鉄血団結党が東方の国に対して起こした事件。
詳細は別話で。
ちなみに、東方側と鉄血団結党側の両方とも死者はでなかったが、鉄血団結党は数十名の戦闘再起不能者をだし、兵器の殆どを失った。
そのため、彼らはアルティナに対して武器の作成を依頼してきた模様。

賢王（けんおう）
東方にある国を治めている王。拳王にあらず。
賢王とはテュリューク達のような一部の者がそう呼んでいるだけで、正式な呼び名は他にある。

シャジャル
原作では故人として登場。
原作サブヒロインの母親であり、現時点でアルティナとの関係は不明。
彼女の名はエルフの言葉で真珠を意味する。

ロマリア
原作で登場する国で、いくつもの国が宗教によりまとまった連合皇国。
始祖の弟子であったフォルサテが祖王。

アルティナの過去
いずれ書きますが、まだまだ先の話です。
シャジャルとの関係もその時に。

処分しようとした成人雑誌
エロ本です。それもかなりマニアックで過激な内容である。
この作品では、シャイターンの門は武器のみ召喚しているように書いてますが、実際は武器に紛れて色々な物が送られて来ています。

本来、かなり細かい描写を入れる予定だったが、筆者が書いている内に「これはＲ指定だ」という結論に至り断念。
一応、全年齢対象にしちゃってるし、しょうがない。

蛮族の酒
ルクシャナの研究資料の一つ。
かなりの量を収集していたが、半分近くを統領にパクられていた。
ちなみに、日本酒の大吟醸である。

統領にするお話
二人がかりでＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩされるテュリューク統領閣下。
彼の明日はあるのか！？

ブリミル教
原作において物語の主軸となっている宗教。
偉大なる始祖ブリミル崇めている。
今後、詳しい追記や独自解釈があるであろう宗教。
もしかしたら・・・アンチブリミル教になるかもしれん。

封建制度
正確には、中世封建制度（フューダリズム）と呼ばれる。
土地を媒介とした国王・領主・家臣の主従関係により形成された社会。
しかし、近世以降の中央集権制を基盤とした絶対王政の中で消失した。

絶対王政
絶対主義や絶対君主制とも呼ばれる。
王が絶対的な権力を行使する政治の形態。
封建制度にありがちな封建的無秩序を避けるため、中央に権力を集中させた制度。王の能力で国の状態が著しく左右される。
無能な人物が王となれば国は崩壊すること間違いなし。
「パンが無ければお菓子を食べれば良いのよ」「民だけでよい、朕は国家なり」

封建的無秩序
極めて非中央集権的な社会のこと。
直接に主従関係を結んでいなければ「臣下の臣下」は「主君の主君」に対して主従関係を形成しなかった為、複雑な権力構造が形成された。
そのため中央に権力が集中せず、汚職や不正などが多発するようになった。

異端審問
原作では油の窯に入れられる。
しかしルクシャナはそこまでわからない、ということで絞首の仕草を見せた。
ヨシュア、女性と仲良くし過ぎると2年F組の異端審問会にかけられますよ？

第十話　言葉の壁は何処（前書き）

感想と評価を頂きました、ありがとうございます。
今回は砂漠越えの下準備回です。

第十話　言葉の壁は何処

イルカ達の背に乗り、海母の巣へ戻る途中、アルティナは俺に東方への行き方を説明してくれていた。

「東方に行くには・・・どうしてもサハラ砂漠を・・・越える必要がある」

「まいったな、砂漠越えなんて人生初だぞ」

東方に向かう準備を整えるにしたって、やはり情報が必要になってくる。また色々と彼女達に聞かなければなるまい。

さっそくアルティナに質問しようとした時、ルクシャナが会話に割り込んできた。

「ねえ、本当に東方へ向かうの？このままここで海母と暮らしてればいいじゃない」

「あの、ルクシャナさん。俺は故郷に帰りたいんですよ？そこの所、理解してますよね」

まさかの発言に俺は敬語が混じった変な言葉で返事をしてしまう。俺の目的を全否定されるとは思わなかった。苦虫を噛み潰した顔をしている俺に、彼女は説得するかの如く話しかけてきた。

「あのね、わたしはヨシュアがこの世界の生活を楽しんでいるように見えるの。それに海母はあなたのことを気に入っているし、アルティナだってあなたと関わってから笑顔になる事が増えているのよ。わたしだって、もっと異世界の話が聞きたいし・・・」

ずいぶんと嬉しい事を言ってくれるじゃないの。お察しの通り、確かに俺はこの世界の生活をとても楽しんでいる。地球の社会で常に感じている柵(しがらみ)を気にすることなく、悠々自適に生きていられるからな。

しかし、俺は必ず元の世界へ帰る。帰ってもっと会社を盛り上げていきたいんだ。それに、ここで俺の意志が折れたら、今までの鍛錬や探究が無意味になってしまう。

「ルクシャナ・・・彼の決心は固い。言うだけ・・・無駄」

そう、言うだけ無駄だよ。最初の頃ならいざ知らず、今となって俺の目的は揺るぎようもない。しかし、諦めの悪いルクシャナはさらに喰い付いてきた。

「でもね、あなたは「ルクシャナ！」――――わかったわよ・・・」

まだ説得を続けようとする彼女に、アルティナは素早く言葉を重ねて止めさせた。ルクシャナは、ぶーぶー、と言いながら非常に不機嫌な顔となり、俺達から顔を背ける。

ルクシャナの諦めたような素振りを見て、アルティナは先程の砂漠越えについて説明を再開した。

「わたし達エルフでも・・・独りで砂漠越えは無謀。叔父さまのような・・・高位の”行使手”でなければ越えることは・・・難しい」

むしろ、単独で砂漠越え出来る彼女達の叔父に、俺は驚いているよ。彼はエルフにおけるチート的存在なのかもしれない。

それは兎も角、いくら準備を整えたとしても俺独りで砂漠を超え

ることは至難のようだ。少し落ち込む俺に、アルティナは大丈夫と言いながら説明を続けた。

「独りで越える必要は・・・無い。手段は幾らでもある」

例えば東方の密偵と交渉して連れて行ってもらうとか、自分たちが研究の為と称して密会している東方の商人に同行する等々、彼女は色々な手段を教えてくれた上で、こう結論付けた。

「最善の方法は・・・護衛として商人に同行すること。条件として・・・彼らを護衛できるくらいの強さが必要」

ふむ、確かにそれが一番まともで堅実だな。俺は以前まで海母に鍛錬を見てもらっていたから、かなり実力は付いていると思うし。

うんうん、頑張ってた成果が実りそうだと独り頷く俺に、彼女は厳しい表情になりながら語った。

「ヨシュアは・・・まだまだ鍛える必要がある。何より実戦経験が・・・皆無。少なくとも・・・・わたし達と互角にならなくては・・・護衛なんて無理」

「うぐっ！」

流石、現実主義者のアルティナ。彼女が下した俺の評価は、的確過ぎて実に厳しかった。

確かに海母の鍛錬は基礎体力の向上が主だった。実戦なんて一度も行っていない、あるとすれば三度ほど海竜と戦ったぐらいだろう。ちなみに戦歴は一勝一敗一引き分けだ。これは、まだまだ精進する必要があるな。

己が思慮の甘さと実戦経験の無さを痛感していた俺に、アルティナは優しく励ますように話しかけてきた。

「大丈夫。あなたの準備と・・・並行して実戦訓練を行う。わたしと・・・ルクシャナで」

「ありがとう。どのくらいの期間になるか分からないが、二人ともよろしく頼む」

そう俺が話したところで、こちらに背を向けていたはずのルクシャナが”にぱあぁ”と晴れやかな笑顔になった。そして彼女は何度も頷きながら鼻歌を歌い、その爛々とした視線を俺に投げかけてきた。

何だ？彼女の頭に何が起きた。いきなり彼女が嬉々とした雰囲気になったため、俺は思わず彼女の精神状態を疑ってしまう。

そんな事を知ってか知らずか、彼女はいつも通りの調子でこう発言した。

「いやぁ、そうよね。準備には結構時間がかかるわよね。うんうん。・・・少しでも長引かせて異世界の話を・・・」

おい、ちょっと待てルクシャナ。最後の呟きは聞き捨てならないぞ？俺はすぐさま彼女に抗議の言葉を上げようとしたのだが・・・

「ルクシャナ！・・・訓練を真面目に手伝わないなら、ごにょごにょ・・・「わ、わかったわよ！今の発言は無し無し！！」――――よろしい」

既に、怒ったアルティナに諭されていた。一体、彼女はルクシャナに何を話したんだ？

「しばらくは・・・海母の鍛錬を続けて。・・・・数か月の療養であなたの身体は・・・・衰えているはずだから」

「確かにそうだな。了解」

そう会話しながら俺達は互いに笑みを浮かべる。それを見ていたルクシャナは・・・また拗ね始めたな。今までの行動といい、先の発言といい、絶対に後先の事を考えていないぞ、この女。

しかし、ここで彼女は唐突に拗ねた表情から真面目な顔へと変わった。そして俺に重い言葉を投げてきた。

「訓練はちゃんと付き合うわ。その代り、故郷に帰るために東方へ向かう事を、しっかり海母に説明しなさいよ」

受け取ったその言葉は鎖の如く絡みつき、俺の心を沈めていく。

「ああ・・・わかってる」

至極まっとうな事を言った彼女に、俺は曖昧な言葉で返すことしかできなかった。

そうだ、今まで助けてくれた海母に対し、俺が何の説明も無く出て行くのは不義理というものだ。分かってはいる。分かってはいるのだが・・・

俺は何か大きな楔を打たれた様な気分になりながら、海母の巣へ帰還した。

～　第十話　言葉の壁は何処（いずこ）　～

――――――悪魔の門を目撃してから数日後

俺は現在、砂漠越えの準備と海母の鍛錬を両方こなす日々を送っていた。アルティナ達との実戦訓練は、身体を鍛え直し終えてから行うことにしている。

恐らく、鍛え終わるのは一カ月以上先の話になりそうだ。何せ、二カ月以上も身体を鍛えていなかったのだから。

しかし何時でも、思いもかけない問題とは突如として現れる。

海母の巣にて、おのおの楽な姿勢で座りながら、俺達は砂漠越え

に必要な物は何か話し合っていた。主に俺とアルティナが話し合い、ルクシャナが書記としてその会話の中で出てきた”必要な物”をリストアップしていく・・・はずだった。

「いやあ。まさか”こんな事”に今まで気が付かなかったとは」

俺はポリポリと頭を掻きながら、目の前にいるルクシャナの顔を見る。視界に映るは苦笑いの彼女。どうやら、向こうも予想外だったようだ。

「まあ、よく考えれば”こんな事”ぐらい分かったはずよね」

あ、あはははは・・・と乾いた笑みを浮かべるルクシャナ。そして彼女の隣には、呆れた表情をしながらじと目で俺達を交互に見つめるアルティナ嬢がいる。

「既にルクシャナが・・・教えているものとばかり思ってた」

そう、アルティナは、以前からルクシャナと俺が何度も異世界の事を話し合っていた所を見て、彼女が俺にこの世界の文字を教えていると思い違いしていたのだ。

だが、いざルクシャナが記したリストを読み上げようとした時だ。ここにきて俺が全くこの世界の文字が分からない事が判明したのである。

そのじと目に見つめられ、ルクシャナはうっと呻いた後にこう弁明した。

「いや、ほらさ。わたしって気になる事があるとそれに夢中になっちゃうじゃない。だから――――」

「いいから黙る」

ルクシャナのまったく弁明になっていない言い訳を、彼女はばっさり切り捨てる。そして再び俺を見て話を続けてきた。

「あなたは、文字を知らない・・・だけじゃない。恐らく、言葉も・・・わたし達と違う」

「どういうことだ？」

それはおかしくないだろうか。少なくとも俺達はこうして会話が出来ているのだから。疑問に頭を傾げる俺に、アルティナは”わたしの口を見てて”と指示した上で、その理由を語った。

「こんにちは。・・・・どう？口の動きが・・・全く違うでしょ」

確かにそうだった。明らかに、俺が”こんにちは”と言う口の動きと違っている。文字の事もそうだが、こんな事実に今まで気が付かなかったとは、我が事ながら呆れてしまう。

「きっと・・・悪魔の門に召喚された際、この世界に適応できるよう・・・・魔法がかけられた可能性がある」

それを聞いた俺は心臓が跳ねるような感覚に襲われた。何せ自分の知らぬ間に魔法がかけられている可能性があるのだから。恐る恐る、俺はアルティナにこの事を聞いてみた。

「大丈夫。・・・わたしから見た限りでは言語の共通化以外に・・・かけられた魔法は感じられない」

「そ、そうか。なら安心してもいいんだよな・・・」

彼女がどこまで感じているかは分からないが、一先ず安心していてよさそうだ。ほっ、と胸を撫で下ろす俺に彼女は話を続けてきた。

「言葉は問題ない。けど、文字は・・・死活問題」

確かに、アルティナの言うとおりだな。この世界の文字が分からぬまま旅をすれば、色々と弊害が伴うだろう。正直に言って言語学習は苦手だが、今は四の五の言っていられない。

ここで俺の頭の中に疑問が浮かんでくる。

「なあ、エルフ達の使用する文字と東方の文字は同じなのか？」

「それは問題ない・・・はず。東方から来た商人は・・・ハルケギニア語、つまり西の地で使用されている文字とエルフの文字の両方を・・・使っていた」

彼女は少し自信が無いような口ぶりだが、大丈夫だろうか。

しかし、その二種類の文字を覚える事に損は無いだろう。文字を使えるようになれば、万が一に他のエルフや西の地に住む人間と出会うような事があっても、対応がぐっと楽になるはずだ。

「じゃあ実戦訓練の他に、文字学習の方もよろしく頼む、二人とも」

「まかせて。・・・さっそく今日から「文字学習の教材は”これ”よ！」――――！？」

アルティナに叱られ、今まで沈黙していたはずのルクシャナが意気揚々と会話に割り込んできた。その彼女が持っている教材は・・・

・俺の日記兼メモ帳と未使用ノート、それに会社の資料・・・だと！？

「ふっふっふ。このわたしにまかせなさい」

そう言って、胸にドンと拳を乗せるルクシャナ。正直、嫌な予感しかしない。悪い想像を頭に巡らせている俺に、彼女は長々とこう言い放った。

「まずあなたに、わたし達が知っている全ての文字を一から教えるわ。ある程度の学習が終わったら、アルティナはその未使用のノートに文章を書いてヨシュアに見せて文字を読む練習をするの。それと並行して、ヨシュアは”これ”をわたし達の文字に翻訳して。わたしが読めるくらい丁寧に翻訳しなさいよ？」

言い終わった彼女は、目の前に”これ”こと俺の書物をどさっと置く。彼女は腰に両手を置きドヤ顔で俺を見てきた。

待て待て、会社の資料はいいとして、俺のメモ帳もかよ！？・・・ってか、自分が異世界の書物を読みたいだけじゃん。

彼女のあまりにも自己中心的な言動に、思わず俺は声を張り上げる。

「このバカエルフ！自分が俺の本や書類を読みたいだけじゃねぇか！！」

俺の怒鳴り声に対し、涼しい顔をしたルクシャナは余裕の笑みを浮かべた。そして徐々にその笑みは小悪魔の如く変化し、俺へトドメを刺しにかかった。

「あら？あなたはわたし達から文字を教わるのよ。そう、学者のわたしが中心となってね」

「ルクシャナは・・・わたしより世界の文字に・・・詳しいの。・・・・もう彼女（の暴走）を止められない。・・・ごめんね」

「・・・ナンテコッタイ」

俺は意気消沈し、がっくりとその場にうな垂れる。ルクシャナの表情は異世界の書物を読めるという喜びに溢れ、アルティナは彼女の暴走を止められなかったと俺に何度も謝ってきた。

「おやおや。坊やも大変だねぇ」

何故かその時、外出しているはずの海母が俺を憐れんできた・・・ような気がした。いよいよ俺の精神は病んできたのかもしれない。主に、ルクシャナの言動の所為で。

こうして、文字学習に翻訳という苦行が俺の予定に新しく追加されることとなった。

第十話　言葉の壁は何処（後書き）

物語のヒント

サハラ砂漠
原作では”サハラ”と呼んでいる。
サハラとはエルフが自らの住む土地を呼ぶ場合に使う言葉。
具体的な地域を指す言葉では無い。
”我らの土地”という意味で用いられることもある。
本作では「我らの土地にある砂漠」という意味でサハラ砂漠と書きました。今後、表記を変えるかもしれません。

柵（しがらみ）
現代社会で柵がなく生きている人間は極僅かだと思う。

行使手
精霊の力を使う者のこと。
原作中でデルフリンガーがそう呼んでいる。

ビダーシャル・追記
原作では単独でガリアへ赴きジョゼフと交渉していたため、恐らく単独の砂漠越えも可能かと。
ちなみに、本作品のビダーシャル卿はアルティナの影響を受け、チートな存在へ進化しています。

砂漠越えに必要な物
あくまで商人の護衛として砂漠越えを行う際に必要な物。
日常品から武器に至るまで厳選して、持っていく物を極力少なくしようとしている。

ゼロ魔世界の言語と文字
本作では、ハルケギニア語とエルフおろび東方の言葉は共通、ただし文字が違う、東方の文字はまた別にあるといった設定です。
完全に独自解釈とご都合主義です、はい。
なお、原作でハルケギニアとネフテスの言語と文字が共通であるという表記は無い。

日記兼メモ帳
ヨシュアの異世界で体験した事や探索で発見した事などが書かれた手帳。
日記帳はある意味、書いた本人の黒歴史。
これを翻訳して彼女達に見せたらどうなることやら・・・

ナンテコッタイ
／（＾０＾）＼といった表情をする時に使われる。

第十一話　報告（前書き）

総アクセス三万、ユニーク五千を越えていました。
まだまだ至らぬ所もありますが、これからもよろしくおねがいします。

第十一話　報告

ルクシャナ達の指導により、俺はここ一週間の内に文字や単語そして文法を全て覚えることができた。
本来であればもっと時間を喰うと思っていたのだが、またまた予想外の発見により比較的簡単に覚えることができたのだ。

ある程度の文字と単語を覚えたため、俺はアルティナが書いてくれた文書を読む訓練をしていたのだが、突如として目の前の文章がなんと日本語に翻訳されたのである。
その出来事から”ある事”に思い至った俺は、試しに会社の資料をこの世界の言葉に翻訳してみようとした。すると日本語を見た途端、俺の頭の中に翻訳後の文章が浮かんだのだ。
そして、ちゃんと翻訳できているのかどうかルクシャナ達と確認したところ、俺が話した内容と彼女達が読んだ内容が完全に合致していたのである。

「呆れた。なんでこんなに早く覚えちゃうのよ？・・・・これじゃ異世界の事を聞く時間が稼げないじゃない」

相変わらずルクシャナは酷い言いようだ。そこはせめて頑張ったねの一言ぐらいあってもいいだろうに。
そして最後に言った言葉だが、まだ俺の東方行きを妨害するつもりだったのか、お前は。

「今のヨシュアから・・・何か魔法の力を感じる。もしかしたら・・・ヨシュアの意志に反応した？」

どうやら俺に文章自動翻訳のような魔法が働いたらしい。言葉を

覚えたいという意志に反応したとか・・・どうなってるんだこの世界の魔法は？

「流石、ファンタジー系異世界。都合が良過ぎだろ」

俺は心に思った事をなんの捻くれもなく口にする。

そんな俺に対し、ルクシャナはファンタジーってなによと言いつつ席を立ち、アルティナはこの世界だからしょうがないと意味不明な事を言いながら笑っていた。

兎に角、これで文字の問題は無事解決したわけだ。いやぁ、一時はどうなることかと――――

ドサッ！バサッ！

――――全然解決していなかった。戻ってきたルクシャナが、俺の前に書類の山を投下してきたのだ。

洞窟内に書物を置く音が響き渡る中、にやりっと笑う彼女。その顔はいつもの如く悪戯好きの小悪魔を彷彿とさせていた。

「さあ約束通り、確認の為に書物を全て翻訳してもらうわよ？」

言っておくが、文字習得の確認をするために”それ”を翻訳する事は了解しているが、俺は約束までした覚えが無い。

「約束なんぞした覚えはないぞ。それに文字の読み書きならさっき確認したじゃないか！」

俺は間髪入れず彼女に抗議する。自動翻訳が利いているのなら、これ以上の確認は不要のはずだからだ。
あれだけの書物を翻訳するとなると相当な時間が掛かってしまい、東方に向かうのが遅れてしまう。鍛錬の時間や砂漠越えの準備を考えれば尚更だ。
しかし、彼女は俺にとって回避不能の言葉を投げてきた。

「あら？短い間とはいえ、あたしはあなたに文字を教えたのよ。まさか恩を仇で返す”蛮人”のような行為を、”人間”のあなたがやるわけないわよね？」

「ぐぬっ！？」

初めてルクシャナが”人間”という言葉を口にしたのは俺にとって喜ばしい事だ。だが、まさかこんな酷い殺し文句に利用するとは思わなかったぞ。
俺は恩や義理をしっかり返す主義なので、このように言われれば断りようがない。きっと人間研究者の彼女は、俺の性格を解析し終えているのだろう。

この世界の魔法に言葉の壁なんて無かった。ついでにルクシャナ（バカエルフ）の我儘も消えて無くなってしまえばいいのに。
そんな事を考えながら、俺は山の如き書物の解体に取り掛かった。

～ 第十一話　報告 ～

――――海が穏やかな日の午後

文字習得からさらに約三週間、俺は書類の翻訳を終わらせ、ようやく一息つくことができていた。ふうーと深呼吸し疲れた体へ酸素を送り込む。

地球ではこんな時に煙草を吸っていたのだが、生憎とこの洞窟は禁煙指定だ。以前、海母の前で吸った時は”わらわの鼻が曲がるから止めよ”と氷のブレスを喰らった。

曰く、あれは消火活動じゃとのこと。

それは兎も角、疲れた体を揉み解している俺に、みしみしと音をたてて海母が近づいてきた。

「お疲れだね、坊や。どれ、肩でも揉んでやろうかえ？」

「遠慮する。肩どころか体の全てが潰れてしまう」

そんな会話を何回か交わしてから、俺は今日の鍛錬を始めた。海母は会話の後、俺の様子を見ながら微睡んでいるようである。

まるでルクシャナ達が来る前の日常に戻ったかのような雰囲気が

そこに在った。

現在、この洞窟には俺と海母の二人っきりである。

今朝方、ルクシャナとアルティナは砂漠越えに必要な品を調達するためルクシャナの家へと向かった。

俺は鉄血団結党の連中が監視してるだろうから止めておけと忠告したのだが、連中の現状を確認するためにもわたし達は行かなければならない、それに”認識阻害”の魔法もあるから大丈夫だと言い、聞く耳を持ってくれなかった。

余談だが、普段のルクシャナは本国から少し離れたオアシスに、アルティナは養父であるアルティナの叔父と共に本国の首都アディールで暮らしているそうだ。俺はてっきり、二人とも同じ家に住んでいるとばかり思っていたぞ。

閑話休題

俺は一通りの鍛錬メニューを終え、この一カ月間でようやく体のキレが戻っていることを実感していた。少しばかり想定外の事もあったが、おおむね予定通りだ。この調子ならもう数週間後には東方に向かうことが出来るだろう。

残る必要事項は、アルティナ達と実戦訓練を積むこと、それと荷物の準備、あとは・・・

ここで俺は”東方に向かう前に、海母にちゃんと説明しておきなさいよ”というルクシャナの言葉を思い出していた。

そう、未だに俺は海母へ伝えていないのである。海母にいつか大

事な話をすると言って、俺は覚悟を決めたはずだったのに・・・

しかし、書類の翻訳や鍛錬等で忙しかったとはいえ、俺には説明するだけの時間があったはずだ。だが、いざ説明しようと思っても、心に突っかかった何かが邪魔をして言えなかったのである。

きっとまだ心の何処かに、この日常を捨てきれない未練が残っている。だが、このまま悪戯に時間が過ぎれば余計に言い出せなくなるのは目に見えている。

俺は地球に帰る、そう故郷の日本に帰るんだと、心の中で何度も何度も自分に言い聞かせる。そして、微睡む海母を起こし、意を決して俺は語った。

「海母、もうじき俺は帰る手段を求めて東方へ向かう」

言った、ようやく言う事が出来た。話した瞬間、俺は海母とこの日常に別れを告げたような感覚に襲われ、戸惑う。

だが、例え別れを告げたとしても今の日常が無くなるわけではない、きっと海母は出発の日までいつも通り俺に接してくるはずだ、そう頭の中で戸惑いに言い聞かせながら、俺は海母の返事を待った。

俺の考え込む姿を見て、海母はその優しい眼差しを細め、ほんの少し間を置いてから呆れたような口調で喋りだした。

「ようやっと話したのう。坊やにしてはえらく報告するまでに時間がかかったじゃないか。・・・存外、臆病なんじゃな」

「・・・まあ、色々とあってね。何があったのか、言った方がいい

か？」

真面目な顔で視線を向ける俺に対して、海母はムスッとした表情で言葉を続けてきた。

「わらわを侮るんじゃないよ、坊や。これだけ長く生きていると、この世界に起きている大抵の事は分かるようになるもんじゃて。それが例え、人の子の事情であったとしてものう」

なんでもアリだなこの韻竜は。海母のような長寿の種族にとって、個人情報なんてものは無きに等しいのかもしれない。ついでに、この世界はプライバシー保護が存在しないとよく理解できた。

「全てお見通しとは恐れ入る。なら、俺が東方に向かう理由（わけ）を話すのは不要か」

「・・・いや。それは坊やの口からしっかり聞かせておくれ」

「・・・どっちなんでい」

会話の流れで海母に説明する必要は無いと思っていた俺は、思わず変な言葉でツッコんでしまう。

しかし、ここで海母は意外な発言をしてきた。

「坊やが出発するその日まで、わらわは会話を楽しみたいのじゃよ・・・」

どこか哀愁を漂わせ静かに語る海母に、俺は少しでも長く話せるよう、事細かく事情を語っていった。

――――日が暮れる頃

会話の間、海母は話の中で不確定な要素とその対処方法を何度も俺に尋ねてきた。きっと海母が、俺の旅を成功させるために不安要素を潰そうとしている、そう思わずにはいられなかった。

そのお陰かどうかは分からないが、俺の心に無事に東方へ辿り着き帰還方法を探し出すという決心がより大きく宿った気がする。

俺は話そうとした時に”また未練が残ってしまうのでは”と思っていたが、実際に話終わってみると実に清々しい気分が俺を満たしていた。まるで何か大きな仕事を達成したかのように。

「さて、そろそろ夕食時じゃの。久しぶりに坊やの手料理を食べたいのう」

「喜んで！」

どこかの居酒屋の如く返事をした俺は早速準備に取り掛かる。手料理といっても、自前の干し魚をルクシャナ達が持ってきた香草で香り付けして塩を少しまぶして焼くだけなのだが、この男料理を海母はえらく気に入っているのだ。

焼き始めた途端に、香草のいい匂いが洞窟内に漂う磯の臭いを押しのけていく。

ジュウウウウッ・・・・

「ただいまーっと!?何々、ヨシュアが料理してるの?当然、わたし達の分も用意してるわよね」

「ただいま・・・良い匂い」

どうやら二人とも無事に戻ってきたようだ。洞窟内の落ち着いた日常は、彼女達　――特にルクシャナ――　の影響で一気に騒がしい日常へと変わっていく。

俺にもはや一片たりとも未練は無い。だからこそ、今はこの日常を大いに楽しみ、東方に向かう時は胸に希望を抱いて出発しよう。

第十一話　報告（後書き）

物語のヒント

言葉と文字の自動翻訳
悪魔の門（シャイターン）が召喚された者（物）にかける魔法の一つ。
ハルケギニア版ほんやく〇ンニャク。
本作の悪魔の門は、サモンサーヴァントの召喚ゲートとほぼ同じ機能です。違うのは召喚後に契約する相手が居ないということだけです。
原作で、若かりしオスマン学院長と異世界に迷い込んだ軍人が会話を成立させていたことから、軍人に言葉の自動翻訳がかけられていると解釈しました。
ただし、その軍人がハルケギニアの文字を扱えるかどうか不明だったため、筆者が”ついでだから文字もあったらいいじゃん”と追加したのが文字の自動翻訳機能。
ご都合主義、万歳。

書類の山
ルクシャナはヨシュアの日記を持ってこなかった。
どうやら少し前にアルティナから”これ”はダメと言われ諦めたらしい。
助かりましたね、ヨシュア。

悪戯好きの小悪魔
このままではルクシャナが悪女の道を歩んでしまう。

アリィー涙目、どうしてこうなった・・・

消火活動
喫煙者の敵である海母のブレスは”かがやくいき”相当の威力がある。
ヨシュアに対する完全な嫌がらせです。本当に有難う御座いました。

首都アディール
エルフの国ネフテスにある首都のこと。
アルティナとビダーシャルの住居があるり、西の地ハルケギニアとは比べものにならない程の建造物が立ち並んでいる。
原作主人公はその光景を見て、中東の人工都市と呼ばれるドバイを連想していた。

海母の情報収集力
海母が住んでいる海域の情報はイルカ達や海鳥達等から仕入れている。また、世界中の事情は渡り鳥やクジラ達に聞いているようだ。
情報収集の会話は、近所のおばちゃん達が世間話をしているような感じを想像していただければ分かり易いかと思います。
ヨシュアの行動は、海鳥とイルカによって逐一報告されていたのである。
おばちゃん達の情報収集力は侮れない（キリッ

男料理
ヨシュアが学生時代に自炊生活で身に付けたスキル。
例えば、肉と野菜を混ぜて炒め香辛料で味付けするだけの料理とか、

里芋を肉汁で煮込んだだけの料理とかがある。
味はそこそこ旨い。ゆえに海母が氷のブレスを吐くことはない。

第十二話　魔眼と精霊（前書き）

執筆中に何故か停電ぇ・・・

今回でオリ主のチート基礎が出来上がりました。

第十二話　魔眼と精霊

いずれここを去る事を海母に告げた日から数日後、俺はアルティナに体の鍛錬が終わったことを伝えた。そろそろ実戦訓練を始めてもいいはずだ。

すると、彼女は手元の鞄を探りながら、唐突に俺に質問を投げかけてきた。

「あの、ヨシアキ。視力は・・・どう？」

「目の具合は相変わらずだが、どうしたんだい急に？」

「数日前、ルクシャナの家に寄るついでに・・・わたしの家にある研究室にも行ってきた」

そう言って彼女は鞄の中から人間の目玉と同じくらいの水晶のような物を取り出した。洞窟の光ゴケに照らされ、透き通った海の如く輝いている。

俺はそれが何なのか聞くのも忘れ、ただ幻想的なそれに魅入っていた。

「これは”精霊眼”・・・と名付た。・・・意味は文字通り、精霊を見る眼」

そう語りながら、彼女は俺に”精霊眼”とやらを手渡す。手の平のそれは不思議な温かさを発しており、まるで鼓動のように輝きが絶えず変化している。

「これは・・・あなたの目の代わりになる」

「これを俺の義眼にするってことかい？だが右目は失明しているわけでは「いいえ、違う」・・・！？」

思わずギョッとした。久しぶりにアルティナが見せた威圧感溢れる真剣な表情に、俺は完全に気圧されていたのだ。彼女は”体を動かさないで”と言いながら”精霊眼”を俺の手から取ると、ゆっくり俺の右目に近づけた。

直後、俺に奇妙な光景と不快感が襲ってきた。まるで小さな”妖精のような存在”が見えたのだ、それも俺の視力が衰えた右目にだけ。

きっと左右の視界が異なる光景を映す所為で、俺は不快感を感じているのだろう。次第に立っていることが辛くなってきた俺は、自らの意志に反してその場にへたり込んでしまう。

だが、座ってから間もなくしてその症状は回復した。一体、何だったんだ？

「無事、ヨシアキのこと・・・認めてくれた。・・・でも慣れが必要みたい」

「アルティナ、詳しい説明をしてくれ。今、俺に何が起きた？」

すると彼女は、俺の隣にちょこんと座り、少し長くなると断った上で、”精霊眼”と俺に起きた事について語りだした。

◇

この”精霊眼”は彼女のある研究過程で生み出された副産物で、魔法や精霊などの流れを見ることができる代物なのだそうだ。
本来、エルフ達のように精霊魔法を扱う種族には精霊達が見えるため”これ”は無用の長物だ。
しかし人間は、例え魔法を扱う種族（メイジ）だとしても、精霊達を視覚することはできない。だが、”これ”を眼球と融合させれば人間にも精霊達が見える様になるのだそうだ。

確か海母が、人間とエルフの使う魔法は精霊の扱い方が異なると説明してくれたな。エルフ達は精霊にお願いする、人間達は精霊に命令する、だったはずだ。

アルティナはこう考えていた。砂漠を行き来する商人の護衛をするとなれば、エルフ達のように魔法を使う種族や鉄血団結党のような過激派エルフと一戦交えることもあるかもしれないと。
そして、どれだけ俺が強くなろうとも、精霊の流れを見る事ができなければ、その戦いで相当苦戦を強いられるだろうと。
以上の考察から、彼女は俺に”精霊眼”を融合させた方が今後の為になると結論付け、俺の右目に適合するようにあらかじめ自身の研究室で調整を施してきのだ。

なお、調整に必要なのは融合させる生物の体液とのこと。
だから以前に”あなた（の血）が欲しい”なんて言ってきたんだな。あの時はいきなり言われたから、色々と考え過ぎて混乱しちまった。

◇

・・・それは兎も角だ。その事も含め、ようやく全て理解できた。

説明し終えたアルティナから、どことなく焦りの気持を感じるのは気のせいだろうか？
そんな彼女は一息つく間も無く、今後の予定を口にした。
「ルクシャナが戻り次第すぐにでも彼女と協力して・・・ヨシアキの右目と”精霊眼”を融合させる。・・・実戦訓練はその後に行なう」
「随分と急だな。まさか帰宅したときに何かあったのか？」
「あなたは自分の事だけ・・・考えて」
彼女は今日中に魔法でこの”精霊眼”と俺の右目を融合させる手術を行うつもりのようだ。
こんな重要な事、普段の彼女なら俺にしっかり説明した上で不確定要素を全て潰してから実行に移す。しかし、今は説明こそしてくれたが、その内容はかなり端折っているように思える。それに、まだ慣れが必要という要素も解決していない。
これだけ強行軍な彼女は珍しいと思う。
「ルクシャナ・・・遅いね・・・・・」
間違いなくアルティナは焦っている。何に焦りを感じているか、俺には分からないが、昨日の帰宅時に問題が起きた可能性は十分に在り得る。
未だ鉄血団結党の連中がうろついていたのだろうか。はたまた、ルクシャナの婚約者に何か問題でも起き、それを彼女達が知ったのだろうか。

ここまで世話を見てくれた彼女達に何か問題が起きていれば、俺は何の躊躇も無く助ける。例えいらぬ世話だと言われ拒絶されても、俺の力ではどうにもならない問題だったとしてもだ。必ず俺にも何か彼女達の手助けできる事があるはず。

お節介な人間と思われてかまわない、それが俺の生き方だからだ。

〜 第十二話　魔眼と精霊 〜

アルティナとの会話から数時間して、ようやくルクシャナが戻って来た。今日の朝方に、確か彼女は知り合いの商人に接触して護衛の件を話すと言っていた。無事に商人と会い、うまく交渉を出来ただろうか？

「ただいまー。やれやれ、ようやく商人と接触することができたわ。今から二週間後の午後にネフテスから少し離れたオアシス、つまりわたしの家で落ち合うことになったわ」

「おかえりなさい。・・・本当に”そこ”で待ち合わせするの？」

「うーん。確かに連中がうろついていて危ないけど、わたし達と商人がお互いに知っている場所は”そこ”しかないのよ」

ルクシャナはふうふうと肩で息をしている、随分と疲れているようだ。だが戻って早々に、彼女は一連の報告をし、アルティナはその内容で気になった部分を質問していた。

おかしい、普段のルクシャナなら息を整えてから話をする。彼女は基本的に自分の事情を優先するからだ。

そして、いつものアルティナなら、例えルクシャナが疲れながら会話をしたとしても、彼女の息が整うのを待ってから質問をしているところだ。

どうやらアルティナだけでなく、ルクシャナも相当焦っているようだ。

今も彼女達は小声で会話をしている。しかし時折、俺に聞こえてくるその内容はあまり良いものではない。

・・・やはり、まだ鉄血団結党の連中が活動しているのか。

「――――何をぼさっとしているのよ！さあ、融合を始めるわ。そこに仰向けで寝てちょうだい」

どうやら俺が考え込んでいる間に、彼女達はある程度の準備を終えたらしい。といっても、周囲には手術道具らしい物は一切無い。やはり魔法で融合を行うようだ。

俺はルクシャナの言うとおりに寝て、深呼吸をした。

目の前に居る彼女達はどこかぎこちない動きで準備を行っている。まるで初めて歯医者に行った時、執刀医が新人だったかのような、そんな不安を煽られる感じだ。

自らの不安を隠すかの如く、思わず俺は彼女達に話しかける。
「なあ、そんなに焦ってないで、もっと気楽にやってくれ」
「「え！？」」
本人たちは全く自覚していなかったようだ。俺に言われて初めて自分の状態に気づいた、そんな顔をしている。
「あはは。まさか、あなたにそんな事を言われるとはね。まあ、確かに焦っていたわ」
「・・・不覚だった。でも、ありがとう」
そこはかとなく馬鹿にされた気がする。
それはさておき、これで少しは焦りと緊張が和らいだだろう。彼女達はいつも通りの余裕がある表情に戻っている。準備もテキパキとした動作で行っているし、これなら安心だ。
数分で作業を終えた彼女達は最後の準備と称して、俺の全身になにやら針が付いた細い管を刺してきた。よく見ると、管の先には箱のような物がある。
まるで病院の点滴みたいだなと考えている俺に、彼女達が真剣な表情で話しかけてきた。
「融合中は・・・痛みを伴うはず。あなたには・・・魔法で眠ってもらう」
「わたし達、”初めての融合”だから。まあ、夢の中で気楽に待ってなさい」

「はぃ！？」

この局面で彼女達はすごい重大な事をさらっと告白した。こうしてはいられないと、俺は即座に待ったをかけようとしたのだが・・・

「ちょっと待っ「眠りを導く風よ」てくr・・・・・ぐぅ」

アルティナの呪文を聞くや否や、俺の意識は深い眠りへと落ちて行った。

◇

・・・一体、どれほど眠っていたのだろう。

ゆっくりと瞼を開け、周囲を見渡す。視界に映るのはいつもの洞窟、しかし今までに見えなかった小さな存在が沢山漂っていた。

「これが精霊・・・」

だが、先のような不快感は全く無い。不快感どころか、まるで10時間熟睡して目を覚ましたかのような、実にさっぱりとした気分だ。どうやら、彼女達は”初めての融合”を無事に成功させたみたいだな。

空中は緑、海水に青、地面には黄色、焚火の近くに赤の色が、それぞれ集まり踊っているかのように見える。だが、俺が右目を閉じるとその色は消え、左目に映るのはいつもの光景だった。

ふと気づけば、まるで俺に惹かれているかの如く、周りに緑と青の精霊が集まりだしていた。俺はよく眼を凝らして精霊達を観察してみた。

緑の精霊はまさにファンタジー世界の妖精といった格好で、絶えず俺の周りを飛び回っている。これは緑の服を着た青年をナビゲートする妖精という表現が一番しっくりするな。

青の精霊はまるで小さな人魚そのものだ。緑の精霊のようなやんちゃな感じは無く、静かにそして穏やかに俺の周りを漂っている。

きっと緑色が”風の精霊”、青色が”水の精霊”なのだろう。ならば地面に点在している黄色は”土”で、焚火に居る赤色が”火”ということか。

「あ、水の精霊が風の精霊に吹き飛ばされた。・・・なんか水の精霊がプンスカ怒ってように見えるな」

実に不思議で可笑しな光景である。

「ふ、はは、ははは！」

思わず俺は笑ってしまった。だが笑ったとたん、精霊達が一斉にこちらへ視線を向けてきた・・・ような気がした。しかも”風”や”水”だけでなく、”土”や”火”の視線まで感じる。

俺の笑いはどんどん乾いたものに変わっていく。この雰囲気は非常に気まずい。

「まあ、その、なんだ、これからよろしく頼む」

苦し紛れの挨拶を俺が頭を下げて言った途端、何故か精霊達は有頂天（ヨンマックス）といった感じで派手に騒ぎ出した。まるで俺の言葉が通じているかのように。・・・・なぜに？

”風”はビュウビュウと叫びだし、”水”はザザーッと雨の如く洞窟の天井から降り注ぐ。”火”は雨に負けじと焚火をゴウゴウ激しく燃やし、”土”はボコボコと隆起し洞窟の形状を変えていく。

・・・なんだよ、このカオス空間。

「グルルル。こんな夜中に、随分と喧しいのう。目が覚めたじゃないかえ」

実に不機嫌じゃと言わんばかりの威圧感を放ち、ズシンズシンと音を立てながら、海母が洞窟の奥から現れる。

いかん、海母を起こしてしまった。しかもかなり御立腹だ。

「す、すまん海母。なんか俺が精霊達に挨拶したらこんな状況に・・・」

「なんじゃと！？この洞窟の精霊達は、わらわと娘達が契約しとる。本来、こんな状況になりはせぬはずじゃが？」

はて何故かのう、と考え込む海母。よかった、どうやら自身にも分からぬ意外な事で寝起きの怒りは何処かへ飛んで行ったようだ。

だがここで、海母の”娘達”という言葉に気が付かされ、俺はアルティナ達が洞窟に居るか辺りを見やる。

しかし、ここにいるのは俺と海母、そして未だに興奮の止まない

精霊達だけ。アルティナ達の姿は彼女達の荷物も含め、一切見当たらなかった。
嫌な予感が胸を締め付ける。すぐに俺は、アルティナ達は何処に向かったのか、海母に聞こうとした。

ばしゃあぁん！

だがその時、傷を負ったルクシャナが洞窟の出入り口である海面から飛び出してきたのだ。
急ぎ俺と海母は彼女に駆け寄り、応急処置を施す。至る所に傷があるが、どうやらそれほど酷くは無さそうだった。
どうやら意識が朦朧としている彼女を投げたのは、いつも海底トンネルを進む手伝いをしてくれるイルカのようだった。彼は水面から心配そうにこちらを見つめている。

ようやく我を取り戻した彼女は、治療している俺達にこう叫んできたのだった。

「アルティナが連中に捕まったの！わたしやアリィーだけじゃ人手が足りない！助けて！！」

俺の嫌な予感は的から外れてくれなかった、ちくしょうめ！

第十二話　魔眼と精霊（後書き）

物語のヒント

アルティナの研究室
自分の好きな研究を行うため、養父のビダーシャルから与えられた部屋。
部屋の中は様々な物で溢れかえっている。
アリィー曰く、あれは研究開発（マッドサイエンス）の行き着く魔境だ、とのこと。

精霊眼
人間が精霊を見る事ができるマジックアイテム。
ある研究過程でアルティナが偶然にも生み出した物。
人間に対して効果がある事が、どのような経緯で判明したかは秘密。
ヨシュアのチートとなる要素。

針が付いた細い管
原作で登場したエルフの医療器具のような物。
ヨシュアへ精霊眼を移植した際、万が一、不測の事態が起きてもすぐに対処できるように準備した。
彼が目覚めた時、既に外されていた。

「眠りを導く風よ」
眠りの精霊魔法をかける際の呪文。

ナビゲートする妖精
某有名ゲームの妖精さん。
最近、時間が無いにも関わらず、筆者はまたムジュラをやり始めた。
ごまだれー

精霊の姿
風と水はこの話で姿の説明がありましたが、火と土は別話に説明します。
なお筆者は当初、風の精霊をベル〇ルクのパ〇クのような表現で書こうとしたが断念。
・・・奴を書いてしまったが最後、腹筋が破壊される気がした。

精霊達との契約
本作では、強力な精霊魔法を使用するために、あらかじめその場の精霊にお願いしておくことを契約と呼ぶ。
精霊は丁寧なお願いができる者の言う事を聞いてくれるため、雑なお願いをする者の言う事は聞かなくなる。
簡単に言えば、高位の行使手ほどお願い上手。

本作の精霊魔法は基本的に三種類ある。
1．あらかじめその場の精霊と正式な契約をして初めて使用できる魔法
2．物質に宿る精霊と契約しておき、その後は簡単なお願いで使用できる魔法
3．契約無しで、その場の精霊に簡単なお願いをして使用できる魔法
注）ただしアルティナの”認識阻害”のような例外がある。

威力や効果範囲の強い順に並べるとこうなる。

1＜＜2＜3

原作で登場した精霊魔法の一部を分類するとこうなる。

”反射（カウンター）”などの強力な精霊魔法は正式な契約を行わなければ使用できない。

逆に”眠り”などの魔法はお願いするだけで使用可能。

”意思剣”は剣に宿る精霊と契約していなければ使用できない。

以上、独自解釈の塊でした。

何故、海母達の契約を無視して精霊達がフィーバーしたかは別話で。

第十三話　追跡の”足”（前書き）

前回もそうでしたが今回も急展開のような・・・

感想、評価、お待ちいたしております。

第十三話　追跡の”足”

ルクシャナの話によれば、アルティナが捕まったのは海母の巣周辺海域、攫ったのは鉄血団結党傘下の海軍でその規模は小隊とのこと。

まさか、立ち入り禁止海域に侵入し、ルクシャナを撃退しつつアルティナを捕縛するとは。相手は少数精鋭と想定するのが無難だろう。

「今はアリィーが追いかけてるんだけど、でも彼の水竜じゃ追いつけなくて、奴らが軍港に辿り着いたらお終いだから」

「落ち着けルクシャナ、お前らしくないぞ。まずは深呼吸をするんだ。落ち着くまでの間、俺は出発準備を整えておく」

焦りながら支離滅裂に話す彼女を落ち着かせ、俺は即座に装備を始めた。我が一家は”備えよ常に”を家訓としているため、俺は不測の事態が起きてもある程度、対応できる。

正直、エルフの海軍がどのくらい実力を持っているか、俺には見当もつかない。だからこそ、こちらが持てる最大戦力で挑む必要がある。

持っていく装備は、飛び道具としてベレッタと水中銃そしてＳＰＡＳ１２ショットガン、そして接近戦用に小太刀とククリナイフだ。

服装はパンツ一丁、こればっかりは海中トンネルを通るので致し方ない。海中から出た後で、しっかり服装を整えるつもりだ。

そしてアルティナを救出した際、一緒にそのまま東方へ逃亡する可能性を考えて、砂漠越えの装備が入ったアタッシュケースを持ち出す。

ちなみに、アタッシュケースの中にはノートＰＣや携帯も入っている。以前に翻訳した会社の説明資料等の書類は、全てルクシャナにくれてやった。・・・もとい、奪われたとも言う。

それは兎も角、これで全ての準備を終えた。費やした時間は約二分、流石に四十秒で支度することは出来なかったが、十分な速度だと思う。

ようやく落ち着いたのか、ルクシャナは海母と何か相談しているようだ。俺は出発を促すため、彼女達に駆け寄る。

「ルクシャナ、ご覧の通りこちらの装備は万全だ」

「もう準備ができたの！？」

「詳しい状況は移動しながら聞くから、アルティナを救出しに行くぞ」

「え、ええ。わかったわ」

驚くルクシャナを尻目に、俺は海母へ別れを告げようと彼女の顔を見上げた。視線の先に、いつものように優しい目をした穏やかな海母の表情が映る。

場合によってはこの洞窟に戻らない事も有り得るため、これが最後の会話になるかもしれないのだ。

「海母。いままで本当にお世話になり「お待ち、坊や！」・・・むぁ？」

俺が感謝のお礼を言っている最中に、いきなり海母が止めてきたため、思わず俺は変な声を上げてしまった。待ってくれとは、一体どうしたというのだろうか。

まさか一緒について行くなんて言い出すのではないか。そんな事を考え始めた俺に、海母は背を向けてこう言い放った。

「坊や達に見せたい物があるんじゃ。きっと物静かな娘を救出する際に役立つだろうて」

「援助は嬉しいけど、今は一刻を争う事態なのよ？」

「そのくらいわかっておる。なに、時間は取らせんよ。付いておいで」

「「・・・・」」

ルクシャナの反論もスルーし、海母はそのままどんどん洞窟の奥へと進んでいく。仕方が無く、俺達は言われるがままに彼女の跡をついていった。

〜　第十三話　追跡の”足”　〜

俺の記憶が確かならば、この先には彼女の寝床と、何処かへ通じる海水が満ちた穴があったはずだ。

「さあ、はねっかえり娘よ。坊やに”水中呼吸”の魔法をかけておやり。ついでに装備には”不変”の魔法をかけてやるのじゃ」

「わかったわ、海母」

どうやら寝床よりさらに奥にある穴を進んでいくようだ。以前は海母から禁則事項と言われ、先に進むことは叶わなかったが、一体何があるというのだろうか。

”水中呼吸”がかけられた海水を飲み干し、俺は未知の領域へ泳ぎ始めようと海水に飛び込んで・・・

べちんっ――――――

「せっかちは良くないよ、坊や」

・・・海母の水掻きが付いた手に止められた。漫画などでありがちな効果音が洞窟内に反響していく。急に勢いを止められた俺は、体を大の字にしたまま、ずるずると海母の手からずり落ちて行った。

「ここから先は、わらわの背にお乗り」

「先に言ってくれ（ひゃひにひってふれ）・・・」

上手く喋れない。鼻を中心に顔面を強打したためだ。

しかしやれやれ、あれだけルクシャナに焦るなと言っておいて、

結局は自分が一番に焦っているじゃないか。
俺は自分の心を落ち着かせつつ、ルクシャナと共に海母の背に跨った。

海母は俺達が乗った事を確認すると、普段は見せないような素早い動作で海水が満ちた穴に飛び込み、その先へ進んで行く。これが彼女本来の移動速度なのだろう。

以前、俺が海竜に襲われた時、海母が助けに来た速度はもっとゆっくりだった気がするが・・・

それは兎も角、水路の内部は至る所に分かれ道があり、迷路のような構造をしていた。海母がいなければ完全に迷ってしまうだろう。
アダムス家の地下にある迷路に迷い込んだらこんな気分になるかもな、などとくだらない事を俺が考えていたら、海母が急に浮上をし始めた。

「さあ、着いたぞえ」

どうやら目的の場所に着いたようだ。移動時間は僅か数十秒、早すぎる。

「「・・・・!?」」

海母の背から降りた俺達は、そこに広がる異常な光景に思わず目を疑っていた。
到着した洞窟は、海母の巣よりも少し小さめな、光ゴケに照らされた鍾乳洞。淡い月明かりが海面を照らしており、海水が打ち寄せ

ていることから外海と通じる穴があるようだ。

「これってヨシュアの世界から来た・・・」

「・・・なんでこんな物が散乱してるんだ」

だが、俺達が異常と感じているのはそんな神秘的な雰囲気を放つ光景ではない。そこには、神秘を破壊する異物が数多く置いてあったのだ。

「これは、今までわらわが集めていた人間の武器じゃ。もっとも、以前はただのゴミじゃと思うておったがのう。使えそうな物があったら持ってお行き」

異物の正体は俺の世界から来たと思われる武器の数々、きっとこれ等が海母の言う”助けになる物”なのだろう。銃や大砲、ロケットランチャーに戦車そして戦闘機・・・様々な武器と兵器がそこにあった。

以前、俺は海母の巣周辺海域を博物館などと呼んでいたが、この場所こそが博物館だと考えを改めた。

俺は即座に使えそうな物がないか探し出す。なるべく時間をかけず見つけなければならない。

だが、そのほとんどは見るも無残に錆びており、残骸と化していた。やはり見つかったのが海中だった所為だろう。

しかし、こんな過酷な環境で放置された状態にも関わらず、使用できそうな物が見つかった。パッキングされた対戦車ミサイル（ＲＰＧ）と説明書付きの手榴弾だ。

説明書が付属していないＲＰＧは使用法が分からないためここに捨て置くとして、手榴弾なら俺にも使えそうだ。これだけでもかな

り戦力が上がる。
ここで突然、俺はルクシャナに呼ばれた。何か良いものでも見つけたのだろうか。
「ねえ、この船みたいなのは使えないかしら？」
「船だって！？」
どうやらルクシャナは、俺と反対側の方を物色していたようだ。彼女は手を振って、俺に早く来いと催促している。
そこにはモーターボートと、哨戒艇らしき船が”二艘（にそう）”並んで佇んでいたのだ。
驚いている俺達を見た海母は、自らのコレクションを見せびらかすかのように、ふふんと鼻を鳴らして自慢してきた。
「それらはつい先日、見つけたんじゃ！どうだい、使えそうかい？」
「すぐに調べてみるよ」
俺は急いで駆け寄り、船の状態を調べる。
こう見えて俺は機械整備が得意なのだ。もっとも、こんな船を点検するのは初めてなのだが、動くかどうか確認することぐらいは出来る。
まず、俺が真っ先に目をつけた、Ｕ．Ｓ．ＮＡＶＹの文字が刻まれている船から診始める。
どうやら米国海軍の哨戒艇みたいだ。船首に装備された機関銃がやけに目立っている。燃料は十分に入っており劣化もしていない。エンジン関係も問題なさそうだ。
だか、始動方法が分からない。他に安全装置が働いているようで、

従来のディーゼル機械のようにキーを回し、アクセルを噴かすだけでは駄目のようだ。如何せん軍用機械は専門外なのだ。

「残念だが始動方法が分からない。時間をかければ何とかなりそうだが・・・」

「むう、そうかえ・・・」

そう返事をした海母は、まるで自らのお宝が偽物だと分かった時のような、随分と落胆したような切ない表情をしていた。まさにショボーンといった顔である。

何故だろう、見ているこちらが切なくなってくる・・・

「じゃあ、もう片方をすぐに調べて！はやく！！」

「お、おう！」

いかんいかん、ルクシャナに発破をかけられてしまった。俺は急かされるままモーターボートの方を診る。

どうやら一般的な手漕ぎボートにガソリンエンジンを積んだだけの、至ってシンプルな構造のようだ。ボートの中にはガソリンが満たされた携帯容器と二つの刃物があった。

悪魔の門に召喚されたのは、中にあった鉈と鋸が原因だろう。その刃物には血がこびりついている。

・・・ナイスボート的な事でも起きたんだろうか。

その内容は兎も角、俺はガソリンエンジンのリコイルを引っ張り始動を確認してみた。喧しいエンジン音が洞窟内に響き渡る。ガソリンは劣化しやすいから少々不安だったのだが、杞憂だったみたい

だ。

「うわっ！？随分と五月蠅いわね。何事よ？」

「なんじゃ！何事だえ！？」

驚く海母とルクシャナに、俺はクラッチや操作関係の点検をしながら語りかけた。

「この機械が動く音さ。大丈夫、この船は使える！」

「おおお！そうかい、そうかい！！拾ってきた甲斐があっものじゃて」

一転して海母は嬉しそうな表情を浮かべる。役に立つものを俺達に与えることが出来て、彼女はとても満足そうだ。

「なら早く行きましょう！アルティナを助けに！」

「わかっている・・・だが、少し待ってくれ」

俺は急かすアルティナをなだめ、エンジンを停止させてから海母の方を向く。ルクシャナも俺の心情を察したのか、口を閉じて沈黙してくれているようだ。

スウーと大きく息を吸った後、俺は深々と頭を下げ先程言えなかった言葉を口にした。

「海母。いままで本当にお世話になりました。このご恩は生涯忘れません」

「・・・顔をお上げ、坊や。そしてわらわによく表情を見せておくれ」

海母の言葉に思わず胸と目が熱くなってきた。俺はゆっくりと顔を上げ、海母と視線を合わせる。

「ふぇふぇふぇ。わらわも忘れんよ、坊や。こんな鬼が泣いているような顔を誰が忘れるかね」

「！！？」

どうやら俺は泣いているらしい。目が熱くなっていたのもその所為だったのか。しかし最後まで海母にからかわれる事になるとは思ってもいなかった。

ぐしぐしと目を擦る俺に、海母は一頻（ひとしき）り笑った後、いつもの優しい雰囲気を含む言葉で語りかけてきた。

「さあ、お行き坊や。行って故郷に帰るんだよ」

「ああ！無論だ！！」

海母の贈る言葉を受け、俺は再びエンジンを始動させる。ボートの中ではルクシャナが既に待機していた。

・・・そんなにやにやした顔で俺を見ないでくれルクシャナ。もう限界ギリギリまで恥ずかしいんだからさ。

泣いた事の照れ隠しに、俺は大声で彼女に指示を送った。

「操舵は俺がやる！道案内は任せたぞ、ルクシャナ！」

「はいはい、任せておいて」

ボートの向きを変え、鍾乳洞の出口へ進みだす。人間とエルフそして沢山の精霊を連れながら。

海母の餞別で追跡の足を手に入れた俺達は、アルティナ救出のため外海へと飛び出して行った。

◇

「・・・ふぇふぇふぇ。最後まで可笑しな坊やじゃったわ」

わらわは誰も居なくなった鍾乳洞で独り呟いた。ふと自分の目が濡れていることに気が付く。

「やれやれ、わらわを泣かすとは・・・まこと不思議な人間じゃて」

このような感情を抱いたのはわらわの母が大いなる意志の下へ還った時以来じゃのう。なんとも罪作りな男じゃ。

「あれだけ威勢よく飛び出て行ったのじゃ。おめおめと帰って来た暁には、きつい仕置きをくれてやるとしようかね・・・」

そんな事は有り得ないと十分理解しておる。旅の果てにきっと坊やは故郷へ帰るじゃろうて。

まったく思いもよらぬ事象で坊やは力を手に入れた。こればっかりは、わらわや娘達にも予測が出来んかったのう。

だが、その力のお陰で、風がそして海が坊やの事を伝えてくれる。

ならば今まで通り、これからも坊やの事を見守っていようじゃないか。

「お行き、異世界の迷い人。わらわの息子よ」

願わくば大いなる意志よ、彼の者に祝福と希望を与えたまえ。

第十三話　追跡の”足”（後書き）

物語のヒント

備えよ常に
ボーイスカウト経験者なら誰でも知っている心得。

ＳＰＡＳ１２ショットガン
正式名称Ｆｒａｎｃｈｉ　ＳＰＡＳ－１２はイタリアのフランキ社製の軍用散弾銃。
”Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｐｕｒｐｏｓｅ　Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　Ｓｈｏｔｇｕｎ”（特殊用途向け自動式散弾銃）の頭文字をとってスパスと呼ばれる。
手動ポンプアクションとセミ・オートマチックの切り替えが可能。
映画ではターミネーターやジュラシックパークなどで登場している。

アダムス家
アダムスファミリーの住んでいる豪邸？のこと。
地下にある広大な迷路の先に一族のお宝部屋がある。
筆者はテーマソングがお気に入り。

対戦車ミサイル（ＲＰＧ）
正式名称は肩撃ち式の対戦車無反動砲またはロケット推進式榴弾と呼ばれる。

旧ソ連において開発された。
旧型のＲＰＧ－２と改良型のＲＰＧ－７がある。概ねＲＰＧといえば後者を指すことが多い。

手榴弾
拾ったのはＭＫ３Ａ２という手榴弾。

ＭＫ３Ａ２手榴弾
ＭＫ３Ａ２はアメリカ合衆国で開発された攻撃手榴弾。
アメリカ軍や陸上自衛隊で採用されている。
金属片をばら撒く破片手榴弾よりも危害半径が小さく、接近戦でも友軍を巻き込む危険性が低い。
そのため、敵の陣地やトーチカへの攻撃、室内戦などで使用される。
基本型のＭＫ３とその改良型のＭＫ３Ａ１、ＭＫ３Ａ２の３種類が存在している。

米国海軍の哨戒艇
原作でも登場した哨戒艇。
安全装置（セフティ）を決められた順番で解除しないとエンジンが始動しない。
筆者が知識不足のため本編での使用と後書きでの説明が出来なかった。ごめんな。

モーターボート
本作で登場したのは、一般的な物より大きめなボートです。

ナイスボート（Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ）
某アニメの最終回の放送が予告なしに中止になり、「都合により番組を変更してお送りしています」とのテロップとともに城やボートを映した環境映像が代わりに流された。
それを目の当たりにした海外の人が画像掲示板にてキャプチャ画像とともに放った言葉がこのナイスボートである。
某アニメ最終話、またはその結末に類似する状況の代名詞的用語にも使われる。
中に誰もいませんよ？

ガソリン燃料
ガソリンは劣化が早い。
半年放置したガソリンは使用しない事をお勧めします。

リコイル
手動でエンジンを始動させる場合に引っ張る、取手付きの紐の事。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9753y/

ゼロの使い魔　～異世界奔走記～

2011年12月16日01時36分発行